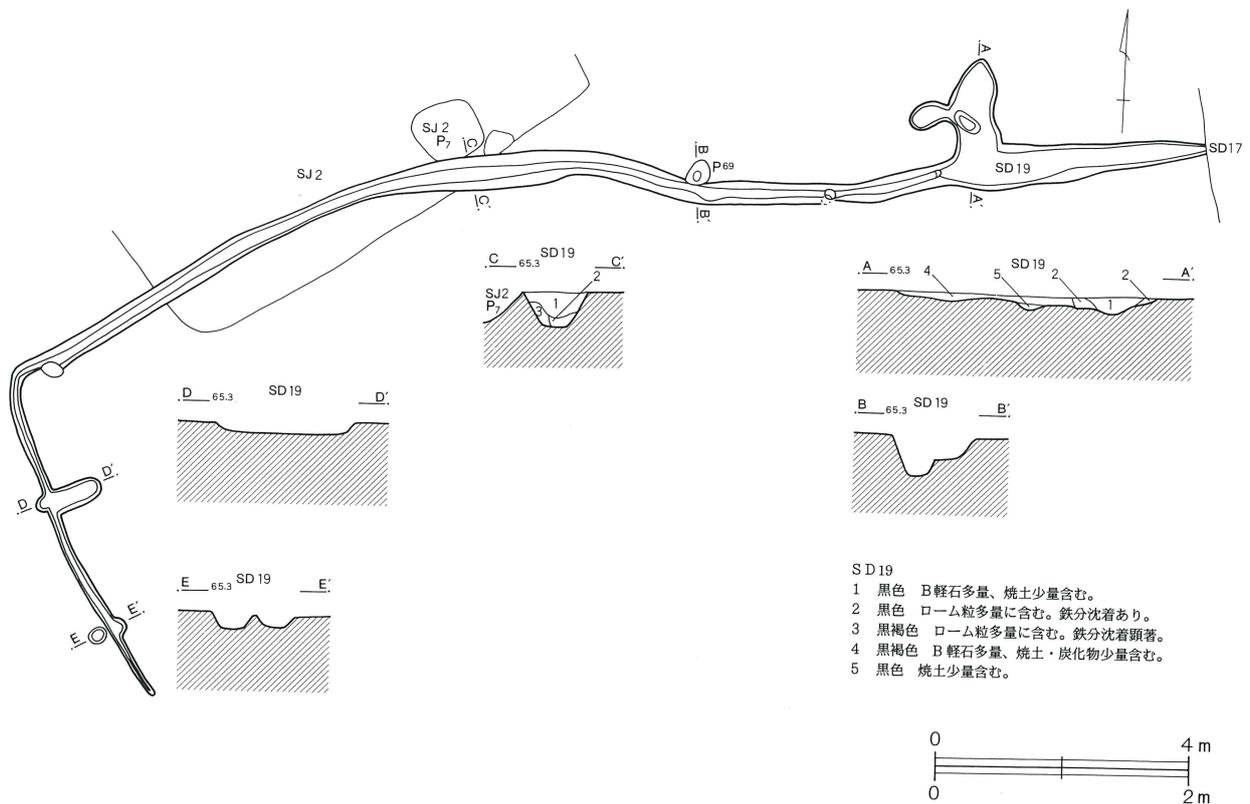


第29図 平成8年度調査区溝跡(9) (第19号溝跡)



跡の位置がわからないが、河川跡に並行し、第3号溝跡にも並行する溝として、用・排水路として機能していた可能性もある。

遺物は、古墳時代前期に属する土師器片 (第16図2 第11号溝跡 (第24図))

第11号溝跡は、第10号溝跡が検出された区域のすぐ南側3~5mの位置に、第12号溝跡とほぼ同じ方向に約1.2mの距離をおいて並行している状況で検出された。検出された長さ8.6mであり、南は調査区南壁の外に続く。幅60~80cmくらいで、平均75cm前後であり、

第12号溝跡 (第24図)

第12号溝跡は、第11号溝跡とほぼ同じ方向性を持っており、検出された長さ約10.3mであり、南は調査区南壁の外に続く。幅25~50cmくらいで平均40cm前後であり、第11号溝跡に比較して幅狭である。深さは5

第13号溝跡 (第26図)

第13号溝跡は第10号溝跡の南約3~6mの位置に、東西方向やや北向きに曲がり気味でN-86°-Eの方向性で検出された。検出された長さ約12.8m、幅

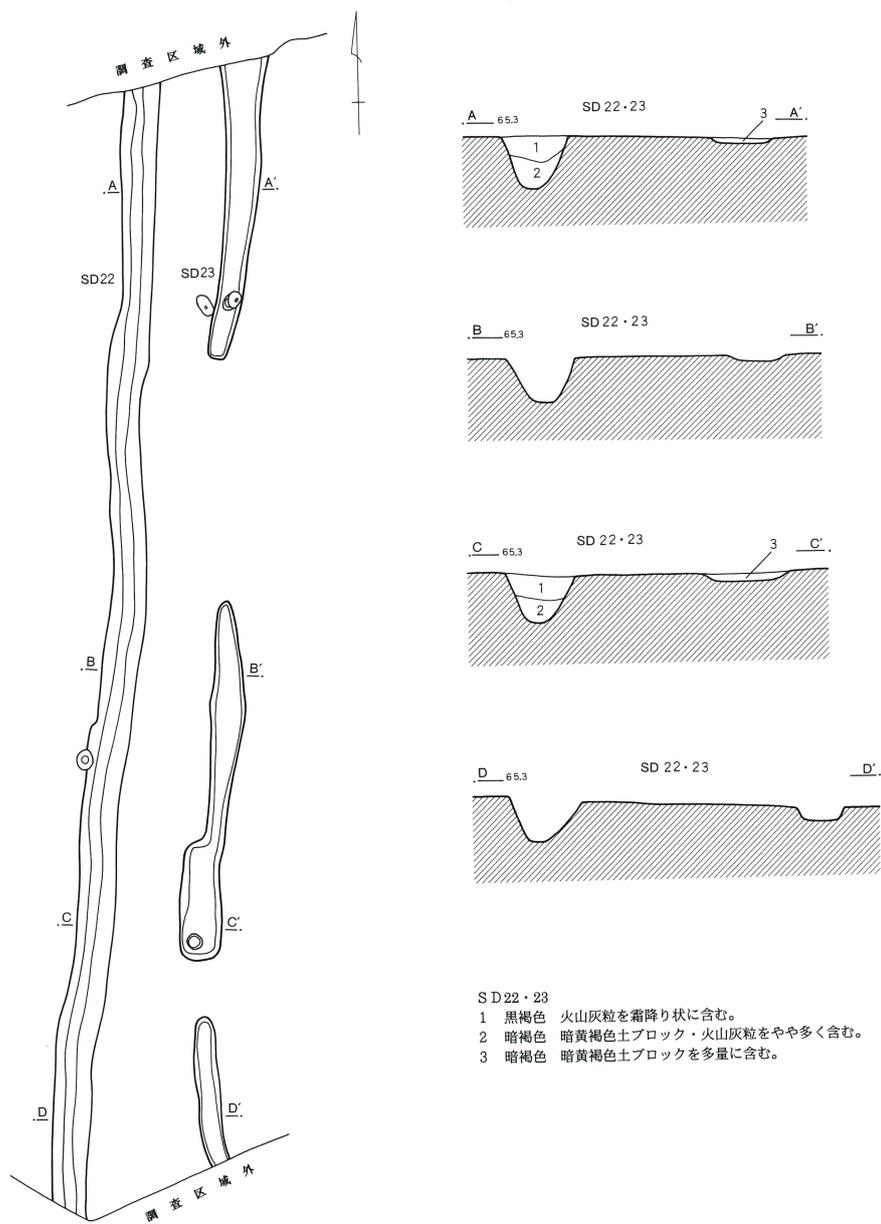
~10)を中心にかなり多数の土器片を検出しているが、いずれも摩滅が激しい。むしろ、8世紀後半以降と考えられる須恵器高台付坏片 (第16図12) の出土から、古代の溝と考えることができる。

深さは6~13cmの浅い溝である。第12号溝跡と並行して走っている部分の方向はN-51°-Eである。第16図1の土師器壺片はこの溝跡からの出土であるが、流れ込みであろう。中世~近世の溝と考えられる。

~10cmで浅い。第12号溝跡と並行して走っている部分の方向はN-53°-Eであるが、調査区南壁付近でややカーブしている。やはり中世~近世の時期と考えられる。

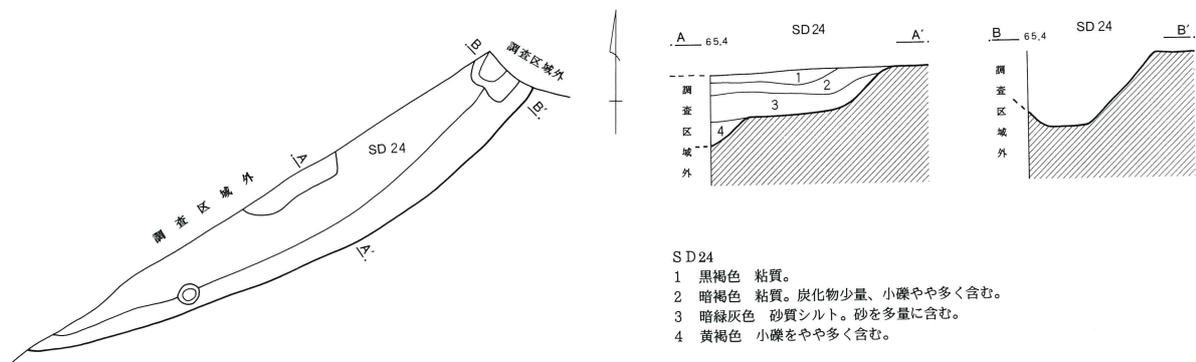
20~75cmで平均約60cm、深さ15~26cmを測る。西端部は浅く細長い土壌状の掘り込みが北寄りに重複し、西端部から約1.5mの位置には長径50cm、深さ22cmの土

第30図 平成8年度調査区溝跡(10) (第22・23・24号溝跡)



SD22・23

- 1 黒褐色 火山灰粒を霜降り状に含む。
- 2 暗褐色 暗黄褐色土ブロック・火山灰粒をやや多く含む。
- 3 暗褐色 暗黄褐色土ブロックを多量に含む。

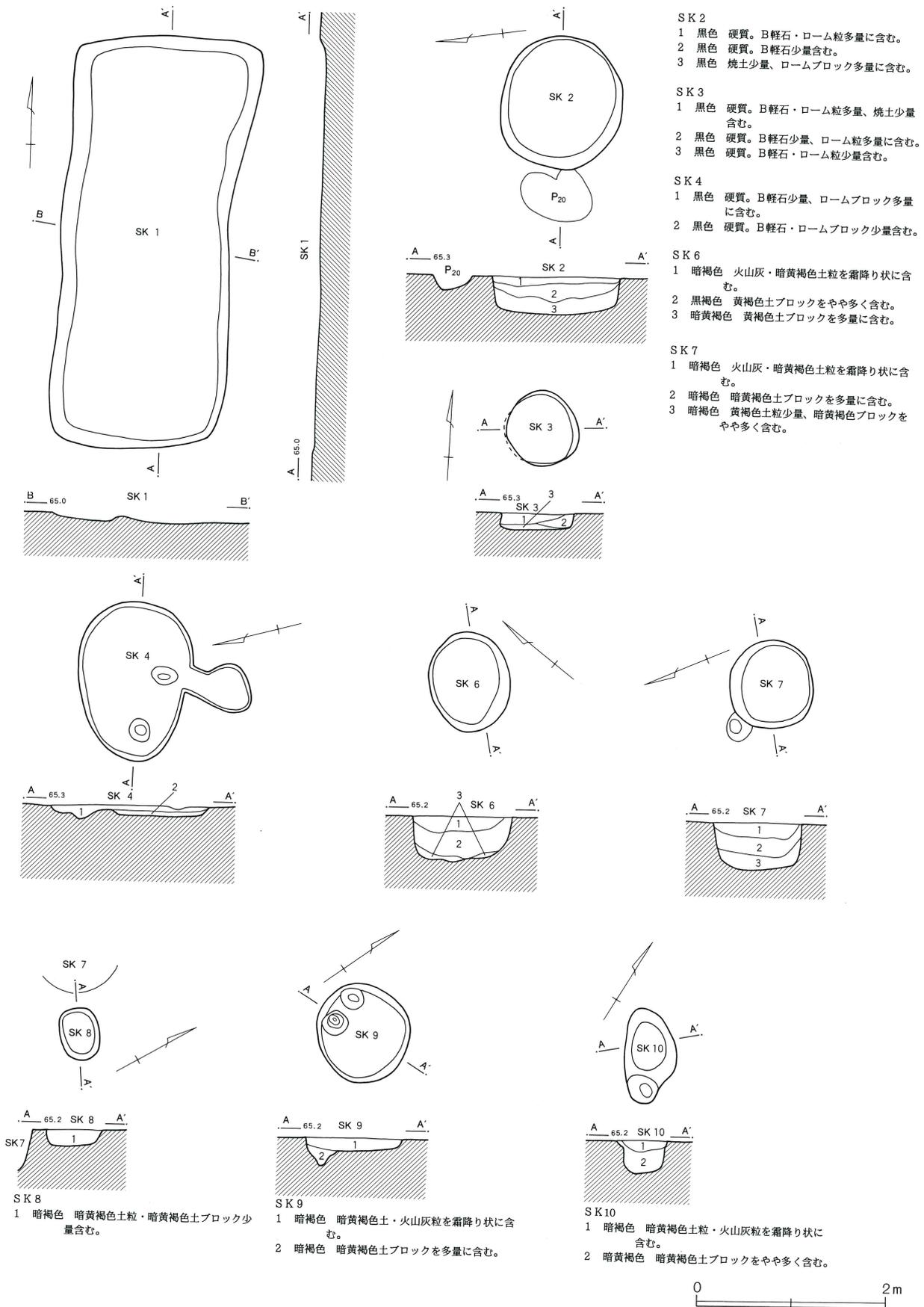


SD24

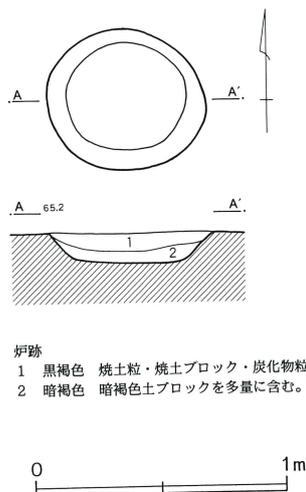
- 1 黒褐色 粘質。
- 2 暗褐色 粘質。炭化物少量、小礫やや多く含む。
- 3 暗緑灰色 砂質シルト。砂を多量に含む。
- 4 黄褐色 小礫をやや多く含む。



第31図 平成8年度調査区土壌



第32図 平成8年度調査区炉跡



炉跡
1 黒褐色 焼土粒・焼土ブロック・炭化物粒多量に含む。
2 暗褐色 暗褐色土ブロックを多量に含む。

壙状掘り込みが南側に重複する。東端部は、幅25～35cm、深さ4cmの細く浅い掘り込みの溝が派生したような形となり、径20～30cm、深さ10cm前後のピット状掘り込みがある。遺物は確認されておらず、時期不明であるが、第3号溝跡に関連する主体部分は掘り込みがしっかりしており、古代の溝の可能性もある。

第15号溝跡 (第26図)

第15号溝跡はII区東部のやや中央部寄り、第14号溝跡の東5m、第11号溝跡の西5mの位置にある。約3m程度しか確認されていないが、調査区南壁の外に続いている。6本のピット状掘り込みが入り込んでおり、幅13～17cm、深さ5～15cm、ピット状掘り込みの深さ

第16号溝跡 (第27図)

第16号溝跡はII区中央部のやや東寄り、第2号住居跡南東コーナーの東約20m、第14号溝の西約5mの位置にある。検出された長さは15m、溝本体の幅1.7～2.4m、深さ50～60cmを測る。溝の方向はN-33°-Eで、北東方向である。やや大きめのしっかりした掘り込みの溝で、本来はV字溝的に掘り込まれていたようである。溝は調査区の南北にまっすぐ通っていることが容易に予測され、古代の用水路と考えられる。しかし、調査区北壁に接して5.5m×5m以上、深さ20～40cmの不整形の大きく平らな掘り込みが西に、7.6m×3m以上、深さ20～35cmの三日月状の枝溝風

第17号溝跡 (第28図)

第17号溝跡はII区中央部のやや東寄り、第2号住居

第14号溝跡 (第26図)

第14号溝跡は、II区中央部やや東寄り、第13号溝跡東端部の南3.5mの位置にある。第1号住居跡の周囲をめぐり、断続的で、ピット状掘り込みなども組み合わさっている。南は調査区南壁の外に続く。壁から北に約1.7m、途切れて東に進み70cm、また途切れて東に進み、径35cmのピット状掘り込みを介して1.45m分、合計2.85m、途切れ目の間隔を加えると4.25m分を確認している。幅は南北方向部分で20～47cm、東西方向部分で20～30cm、深さは南北方向部分で7～17cm、東西方向部分で4～8cm、ピット状掘り込みは8～15cmである。

この溝跡は、断続する特異な形態や、第1号住居跡の周囲をめぐることから考えると、「雨落ち溝」のような第1号住居跡に関連する遺構と考えることもできる。遺物が確認されていないが、第1号住居跡と同時期とすれば中世以前で、古代に遡る可能性もある。

10～17cm程度である。方向は、南壁寄りの1.5mがN-20°-Eくらいの方角になるが、それより北は東にカーブしていく。細い溝であるため、性格は不明である。中世～近世の溝であろう。

掘り込みが東にある、この掘り込みを横断する土層断面からは、この不整形の掘り込みよりも第16号溝跡の方が新しく、掘り込みが途中まで埋まった時点で溝跡が掘削されていることがわかる。調査区北壁沿いで東に2.4mの位置に第10号溝跡が所在していることから考えると、この掘り込みは何らかの取水施設の一部として機能していて、その後に第16号溝跡にその役目を譲ったと考えることもできる。

遺物は土師器片多数があるが、古墳時代前期、奈良・平安時代の双方の時期のものが混在している。第10号溝跡との関連性をもって古代の溝と考えたい。

跡南東コーナーの東約12m、第16号溝跡西の不整形

掘り込みの西約7mの位置にある。N-6.5°-Wの方向性であり、ほぼ南北方向に走る溝である。わずかに東にカーブする。検出された長さは約8m、幅は35~70cmで平均約40cm、深さは15~42cmを測る。北側は調査区北壁の外に続いている。北壁から南へ約2mでピット状掘り込みに接し、南へ3.7~5.4mでV字形

第18号溝跡 (第28図)

第18号溝跡は、検出された長さ約5.3mで、その中央が第17号溝跡と十字に重複している。方向はN-86°-Eでおおむね東西方向である。掘り込みが乱れているため、幅や深さは一定ではなく、幅18~73cmで平均40cm程度、深さは5~20cm程度である。ただし、第17号溝跡の東20cmの位置に、幅30cm前後、長さ50cmの突出

第19号溝跡 (第29図)

第19号溝跡は細長く、全体的には東西方向に伸びる溝である。西端部だけが直角に南に折れ、南北方向になっている。東端部は第17号溝跡に入り込んでしまう。南北方向部分の長さ5.7m、東西方向の長さ約20mである。東西方向部分は、西端部で小さいピット状掘り込みと、西寄りで第2号住居跡と、中央部分で第69号柱穴と、東寄りで浅い土壌状掘り込みと重複する。南

第20号溝跡 (第28図)

第20号溝跡はII区中央部やや西寄りに位置し、第19号溝跡の南約6mである。方向はN-68.5°-Wで北西方向であるが、やや西に曲がり気味である。検出され

第21号溝跡 (第28図)

第21号溝跡はII区西部の調査区南壁際に所在し、壁の方向に沿って所在していた。検出された長さ約5.3m、幅22~35cm、深さ15cmで、方向はN-77.5°-Eで

第22号溝跡 (第30図)

第22号溝跡はII区西端部に検出された。南北方向に調査区を横断しており、調査区北・南壁の外に続いている。検出された長さ約18m、幅46~60cm、深さ37~43cmを測る。方向はN-4.5°-Eでわずかに東に振れている。溝の掘り込みはしっかりしており、東西にわず

第23号溝跡 (第30図)

第23号溝跡は、第22号溝跡の東約1~1.4mの位置

風の土壌状掘り込みと重複し、検出された南端部から北約1mで東西方向の第18号溝跡、約2mで第19号溝跡と重複している。これらと第17号溝跡の関係は、第17号溝跡が古いようである。古代の溝の可能性はあるが、確証はない。

部、長径60cmのピット状掘り込みがあり、第17号溝跡の西側部分は土壌状掘り込み2つ分の組合せのようになっており、通常の溝跡と同じものではなさそうである。近現代のものではないと思うが、植物による攪乱の可能性もある。

北方向部分は、北寄りで小さい土壌状掘り込みと重複し、南寄りでピット状掘り込みに接近している。幅は南北方向部分が10~20cm、東西方向は20~70cmで平均35cm、深さは南北方向部分が10cm、東西方向部分で15~28cmを測る。遺物は確認されておらず、判断はむずかしいが、中世~近世の溝であろう。

た長さ3.3m、幅20~40cm、深さ5~15cmで、南は調査区南壁の外に続いている。中世~近世の溝と思われる。

東北東である。東端部から西約2mにピット状掘り込みと重複している部分がある。やはり中世~近世の溝であろう。

かにゆらぐが、まっすぐ伸びている。南壁から北に7.2mの位置に径30cmくらいの小さなピット状掘り込みが1つ重複している。この溝跡からは遺物が確認されていないが、古代の溝跡になる可能性がある。

に並行して所在する。断続的であり、溝の掘り込みも

しっかりしていないが、第22号溝跡に付随するものかもしれない。調査区北壁から南に4.8m分、約3.85m離れて約4.8m分、さらに約0.9m離れて2.4m分の計約12m分が検出された長さであるが、調査区北・南壁の

第24号溝跡（第30図）

第24号溝跡はⅢ区東北端部に所在する。検出された長さ9mであり、北にカーブしているため溝跡全体のわずかな部分が調査区内に入っているにすぎない。方向はN-59°-Eで東北-南西方向の溝であるが、北側の立ち上がり調査区北壁の外になっているため、幅

エ 土壇（第31図）

平成8年度調査区においては、10基の土壇を検出しているが、いずれもⅡ区にあり、中央部から西部にかけて、第2号住居跡を取り囲むような位置に所在している。平面形態は楕円形・不整円形のものが多いのが特徴的である。

古墳時代前期の土器群一括を伴う第11号土壇以外

第1号土壇

第1号土壇はⅡ区東部に検出された。長さ4.45m、幅2.05m、深さ7cmを測る、長方形の浅い土壇である。

第2号土壇

第2号土壇はⅡ区中央部、第2号住居跡の東約6mの位置に検出された。第20号柱穴とわずかに重複している。長径1.4m、短径1.2m、深さ40cmを測る楕円形

第3号土壇

第3号土壇はⅡ区中央部、第2号住居跡南東コーナーの東約7m、第2号土壇の南東約4.5mの位置に検出された。やや小さめであり、長径80cm、短径74cm、

第4号土壇

第4号土壇は、第2号住居跡の東約3m、第2号土壇の南約1mの位置に検出された。長径1.7m、短径1.23m、深さ10~15cmを測る、倒卵形の土壇である。

第6号土壇

第6号土壇は、第2号住居跡の南壁の南約1mの位置にある。長径1.07m、短径88cm、深さ48cmの楕円形

第7号土壇

第7号土壇は第2号住居跡の南約1m、第6号土壇

外にそれぞれ続いている。幅30~70cm、深さ4~10cmで浅い溝である。第22号溝跡に付随していることにより、古代の溝跡の可能性を考えることもできる。

は不確定であるが、壁際が最深部と考えてよければ、幅3m程度となり、かなり大きな溝となる。深さは調査区北壁際で55cmを測る。遺物は中世~近世の陶磁器を若干含んではいるが、古代の溝の可能性もある。

の9基の土壇はほとんど遺物を伴っておらず、古代~近世のいずれかの時期には属すると思われるものの、特定の性格や機能に言及できるものではない。以下にこの9基について個別に記述する。ほとんど遺物が伴っていないため、古代以前に遡る可能性のあるものは少ない。なお、第5号土壇は欠番である。

主軸方向はN-5°-Eでほぼ北である。中世以降であろう。

の土壇である。主軸方向はN-66.5°-Wで、西北西である。中世以降であろう。

深さ17cmを測る、不整円形の土壇である。主軸方向はN-38.5°-Wで北西である。中世以降であろう。

主軸方向はN-74.5°-Wで西北西である。浅く、底面も凹凸があり、南に長さ70cm、最大幅52cmの突出部がある。近世以降と考えたい。

の土壇である。主軸方向はN-39°-Eで北東である。中世以降であろう。

の南西約1mの位置に検出された。長径95cm、短径90

cm、深さ50cmの不整円形の土壌である。主軸方向はN-

第8号土壌

第8号土壌は、第7号土壌の南東15cmと近接した位置に確認された。長径57cm、短径43cm、深さ17cmを測

第9号土壌

第9号土壌は第2号住居跡の南約2m、第7号土壌の南西約2.5mの位置に検出された。長径1.05m、短径約1m、深さ10~13cmの不整円形の土壌で、深さ約30

第10号土壌

第10号土壌は、第2号住居跡の西約50cm、第9号土壌の北西約5mの位置に検出された。長径1.02m、短径55cm、深さ35cmを測る、不整楕円形の小さな土壌で
オ 炉跡

炉跡とした遺構は、II区西部の第4号竪穴状遺構から西に5m、第21号溝跡から北へ2.5mの位置に検出された。長径64cm、短径57cm、深さ12cmの楕円形で、焼土ブロックを多く含む土で埋まっていたため炉跡と考えた。周囲の柱穴状ピットと組合せとなって住居跡

カ 柱穴

平成8年度調査区において、柱穴はI区中央部とII区・III区の全域に散在してしていた。ピット一般の総数は200以上になるが、概して浅く、柱穴と認定できないものが多い。そこで、便宜上①径20cm以上②深さ15cm以上のものについて「柱穴」として扱い、それに準ずるものも加えたが、結果的には土壌と柱穴の中間形態のものも拾っている。番号はI区東側からIII区に向って付しておいた。位置は全測図(3)・(4)に示したの

平成8年度調査区柱穴計測表(1)

												(単位: cm)				
番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	
1	33	18		21	(38)	15		41	48	22		61	80	16	土壌?	
2	52	14		22	(56)	(5)	土壌?	42	42	20		62	20	21		
3	31	16		23	(20)	36	径54掘方 重複?	43	84	19	土壌?	63	43	37		
4	40	55	径80土壌中 "	24	(64)	14		44	44	11		64	58	28		
5	28	29			25	50	18		45	32	10		65	39	23	
6	22	18			26	32	17		46	29	15		66	45	15	
7	32	9			27	33	19		47	32	18		67	40	39	
8	41	20			28	34	21		48	36	18		68	40	25	
9	40	18			29	60	29		49	81	16		69	(41)	33	
10	29	17			30	(56)	10		50	28	27		70	(31)	24	
11	25	12			31	49	16		51	53	30		71	39	31	
12	53	23			32	(52)	11		52	(60)	57	土壌?	72	34	28	
13	35.5	22			33	57	14		53	(22)	23	土壌?	73	31	23	
14	32	25		34	48	15		54	60	18	土壌?	74	(52)	6	土壌?	
15	44	17		35	39	16		55	54	30	土壌?	75	90	24	土壌?	
16	28	15		36	45	29		56	26	15		76	(54)	19		
17	56	21		37	34	18		57	54	10	土壌?	77	32	38		
18	30	8		38	47	22		58	33	21		78	49	30		
19	37	31		39	(33)	17	径68土壌?	59	32	34		79	34	23		
20	30	29		40	118	10	土壌?	60	44	33		80	30	26		

70.5°-Wで西北西である。中世以降であろう。

る、不整楕円形の小さな土壌である。主軸方向はN-71°-Wで西北西である。近世以降であろう。

cmのピット状掘り込みを2つもつ。主軸方向はN-88°-Wで西である。近世以降であろう。

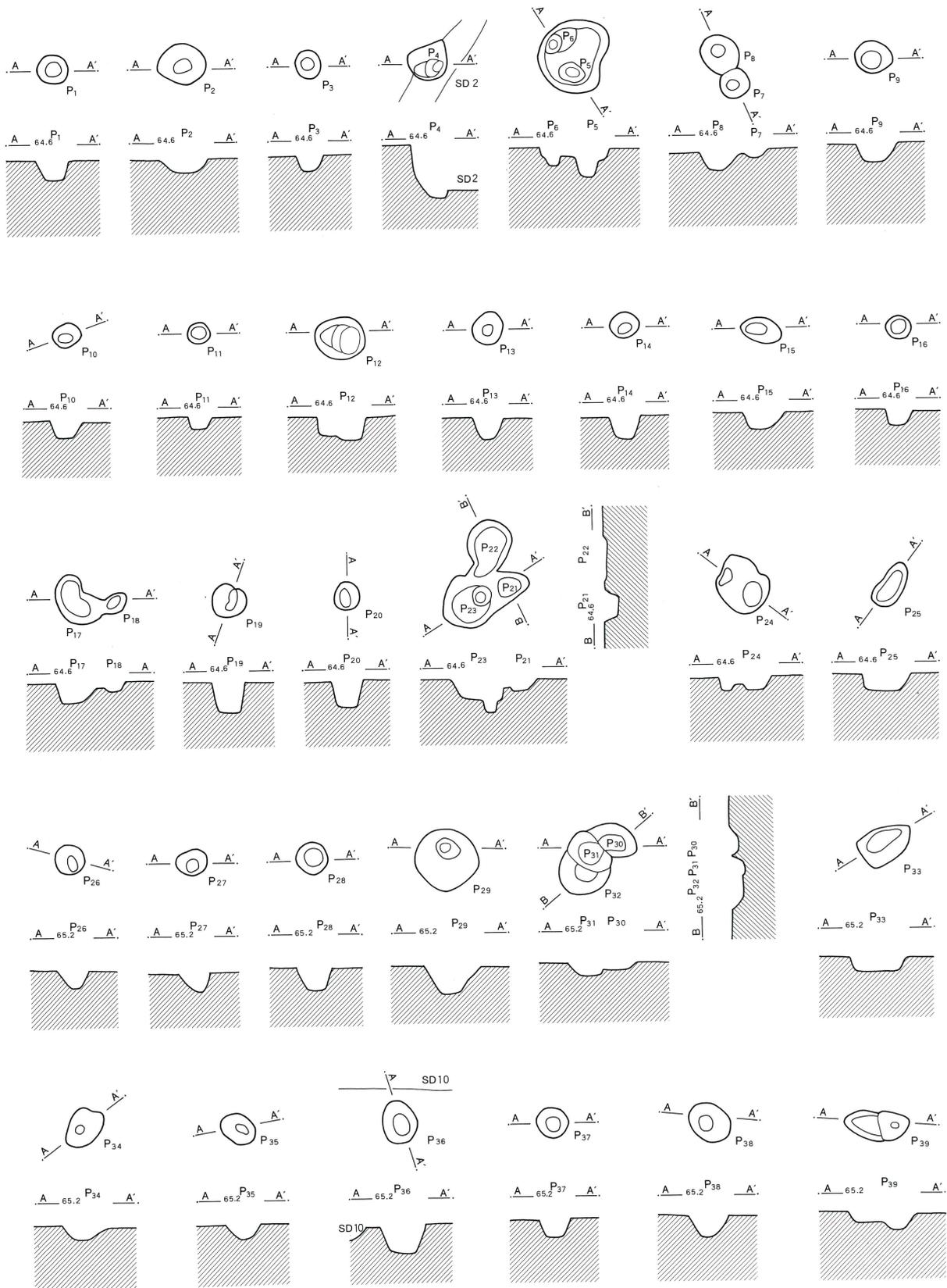
ある。南壁に深さ42cmのピット状掘り込みをもつ。主軸方向はN-36.5°-Wで、北西である。近世以降であろう。

となるかと思われたが、周囲から遺物が検出されず、竪穴が本来あったことも考えにくいので、一応単独の屋外炉としておく。遺物が伴わず、中世以降の遺構と考えたいが、時期・性格ともに判然としない。

で参照されたい。また、個々の平面図の方位はそれぞれ図の直上方向を北としたので、あえて記入していない。I区の第1号溝跡と第2号溝跡の間、II区の第10号溝跡の南側と第2号住居跡の周囲等の区域には、あるいは掘立柱建物跡かと思われるような柱穴の配列も認められるが、あえて建物として指摘できるほど規則的でないため、建物跡の所在については保留しておく。

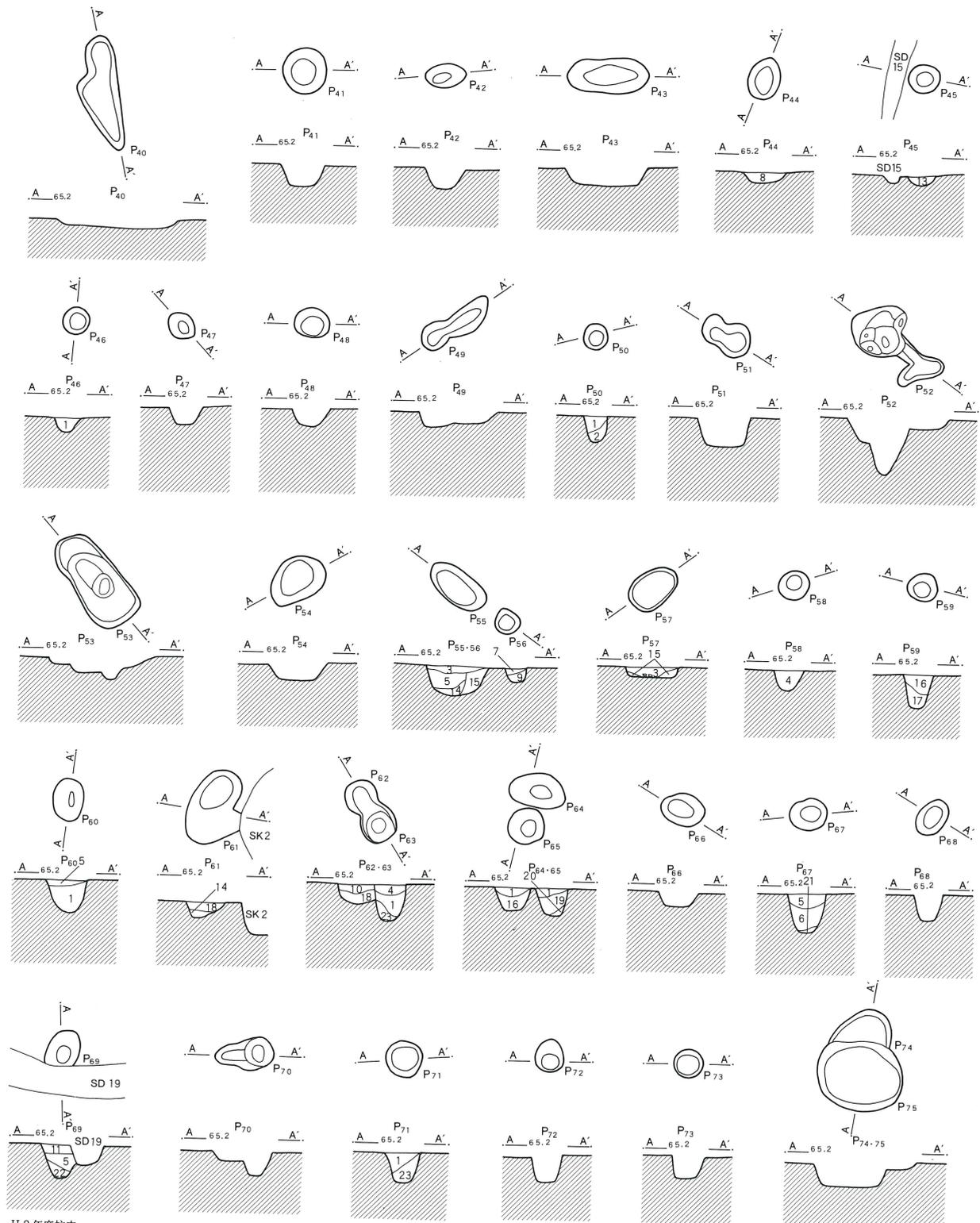
以下に個々の柱穴の計測値を表として掲げておく。

第33図 平成8年度調査区柱穴(I) (第1~39号柱穴)



0 2m

第34図 平成8年度調査区柱穴(2) (第40~75号柱穴)



H8年度柱穴

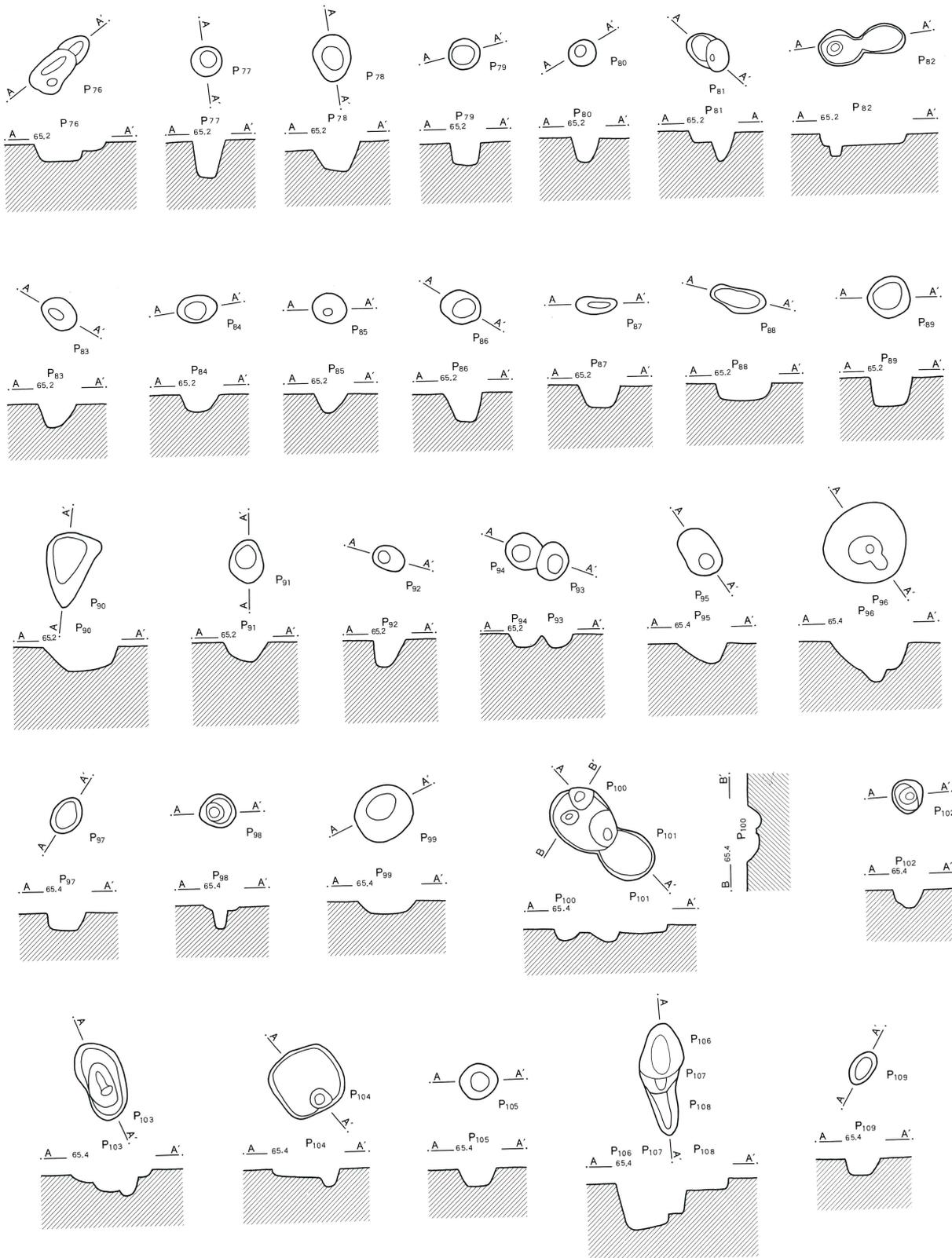
- 1 黒色 火山灰・ローム粒少量含む。
- 2 黒色 火山灰少量、ローム粒多量に含む。
- 3 黒色 火山灰多量、焼土少量含む。
- 4 黒色 灰褐色粘土含む。
- 5 黒色 火山灰・焼土少量含む。
- 6 黒色 ロームブロック多量に含む。
- 7 黒褐色 火山灰・ローム粒少量含む。
- 8 黒褐色 ローム粒多量、火山灰・焼土少量含む。
- 9 黒褐色 焼土少量含む。

- 10 黒褐色 火山灰少量含む。
- 11 黒褐色 火山灰・ローム粒多量含む。
- 12 黒褐色 火山灰微量、ロームブロック少量含む。
- 13 黒褐色 ロームブロック多量、焼土少量含む。
- 14 暗褐色 ローム粒多量に含む。
- 15 暗褐色 火山灰少量、ローム粒多量に含む。
- 16 暗褐色 火山灰少量含む。
- 17 暗褐色 灰褐色土多量に含む。
- 18 暗褐色 焼土少量含む。

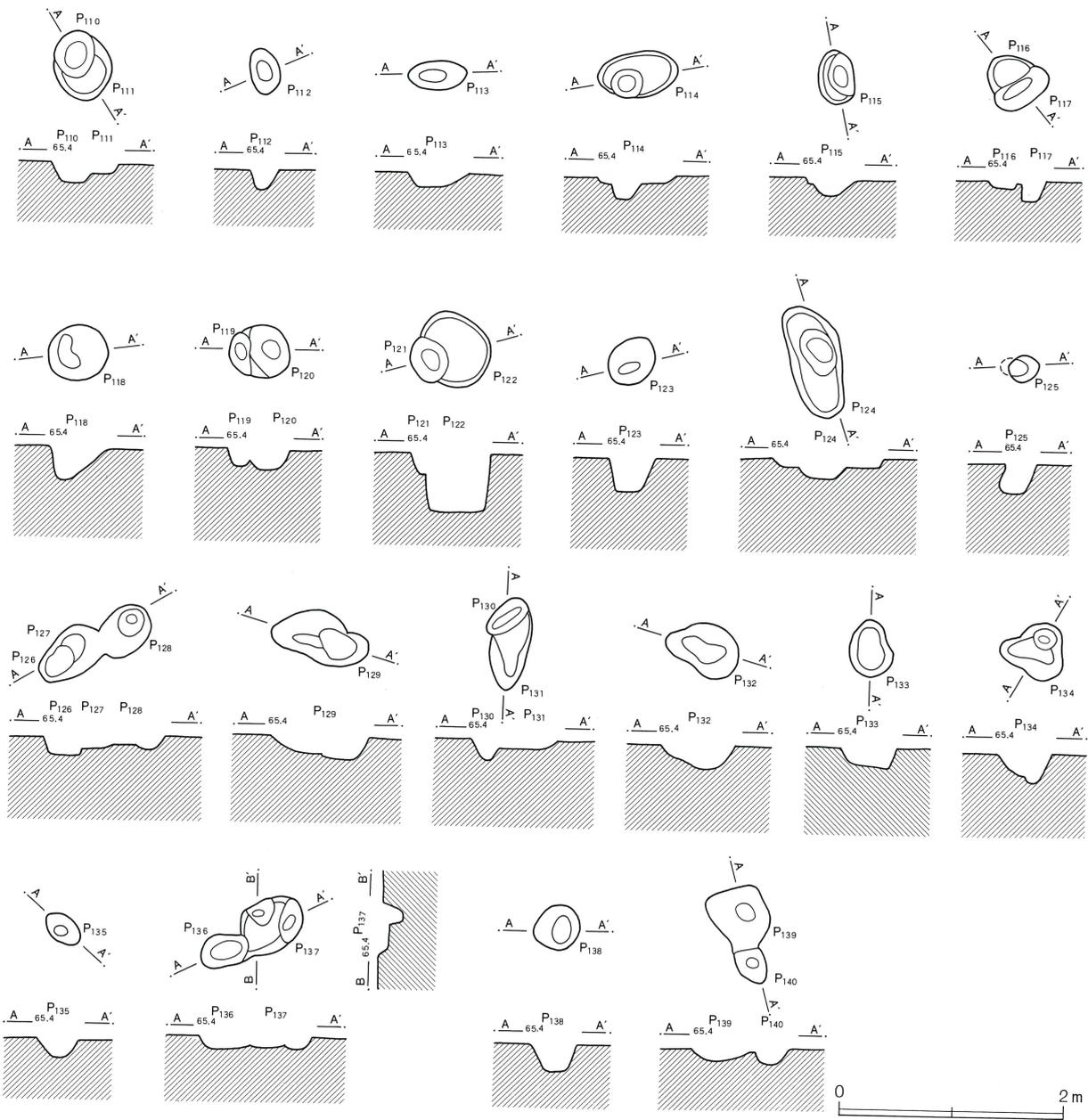
- 19 暗褐色 黒褐色土ブロック少量含む。
- 20 暗褐色 ロームブロック・礫少量含む。
- 21 暗褐色 地山ブロック。
- 22 黒灰色 ローム粒多量に含む。
- 23 灰褐色 粘土。



第35図 平成8年度調査区柱穴(3) (第76~109号柱穴)



第36図 平成8年度調査区柱穴(4) (第110~140号柱穴)

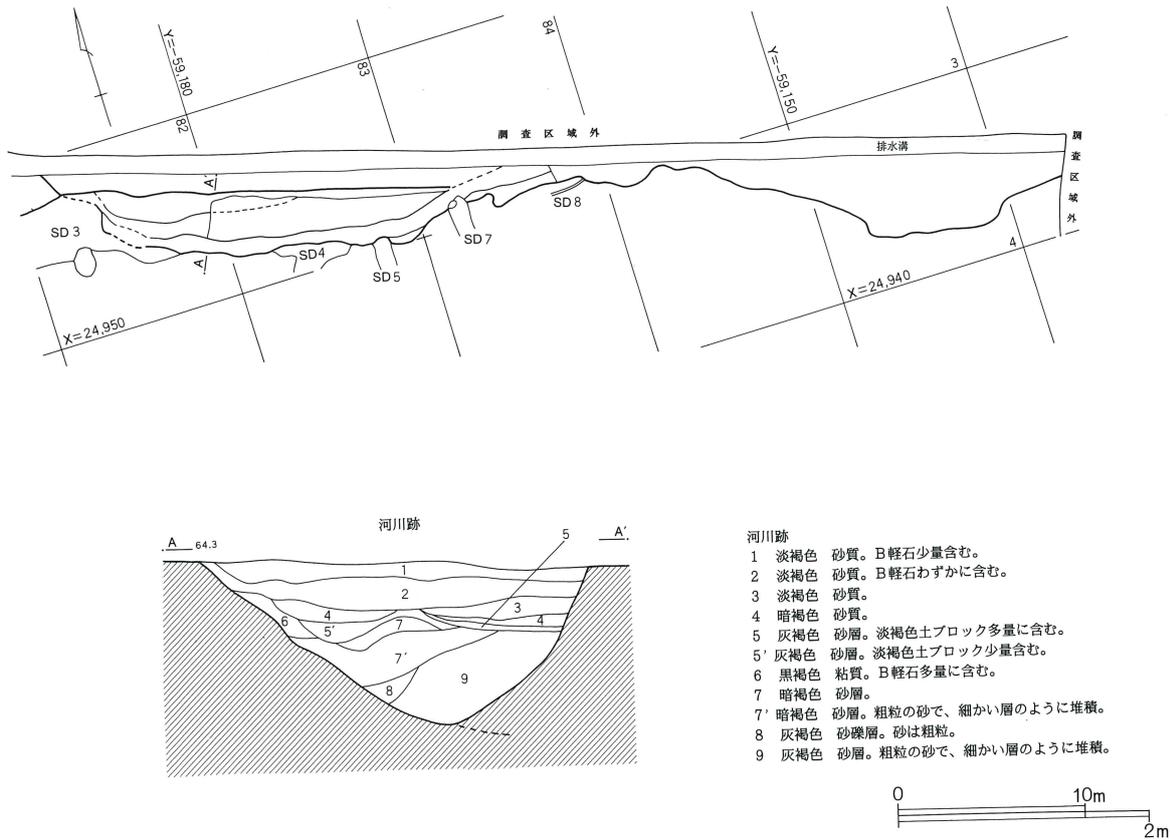


平成8年度調査区柱穴計測表(2)

(単位: cm)

番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考
81	(34)	31		96	87	41	土壌?	111	(64)	7	土壌?	126	36	14	
82	(46)	23	重複あり	97	41	19		112	43	18		127	(66)	11	
83	40	24		98	(20)	24	径39掘方	113	54	14		128	53	12	127と重複
84	42	18		99	61	12		114	(29)	21	径74掘方	129	(48)	20	径90掘方?
85	36	20		100	74	15	土壌?	115	(40)	16	径50掘方	130	44	20	
86	43	30		101	(54)	8	土壌?	116	(44)	8	117と重複	131	72	8	土壌?
87	43	23		102	36	19		117	54	19		132	68	21	土壌?
88	58	18	土壌?	103	83	26	土壌?	118	55	28		133	52	18	
89	45	30		104	(20)	19	径72掘方	119	40	16	120と重複	134	(21)	25	径60掘方
90	78	25	土壌?	105	41	17		120	50	18		135	38	16	
91	45	20		106	56	47		121	42	20	122と重複	136	46	12	137と重複
92	34	28		107	(40)	34		122	72	53		137	(60)	20	土壌?
93	40	15	94と重複	108	59	11		123	50	28		138	44	23	
94	38	14	93と重複	109	38	15		124	(45)	17	径105掘方	139	(56)	11	土壌?
95	53	19		110	43	17	111と重複	125	28	25	掘り込み斜め	140	(27)	14	139と重複

第37図 平成8年度調査区河川跡



- 河川跡
- 1 淡褐色 砂質。B軽石少量含む。
 - 2 淡褐色 砂質。B軽石わずかに含む。
 - 3 淡褐色 砂質。
 - 4 暗褐色 砂質。
 - 5 灰褐色 砂層。淡褐色土ブロック多量に含む。
 - 5' 灰褐色 砂層。淡褐色土ブロック少量含む。
 - 6 黒褐色 粘質。B軽石多量に含む。
 - 7 暗褐色 砂層。
 - 7' 暗褐色 砂層。粗粒の砂で、細かい層のように堆積。
 - 8 灰褐色 砂礫層。砂は粗粒。
 - 9 灰褐色 砂層。粗粒の砂で、細かい層のように堆積。

キ 河川跡

河川跡はII区東部から中央部にかけて検出された。II区中央部の約8m分は掘り下げられるだけ掘り下げ、約13m分は中程まで掘り下げたが、東部の約27m分は平面的な広がりを確認しただけである。平成8年度調査区では、河川跡は第3・4・5・7・8号溝跡と重複している。これらの溝跡群と重複する区域では、川の幅3.1m、深さ1.3mが調査されたわけであるが、実際にはこの3～4倍くらいの幅、1.5～2倍近い深さ

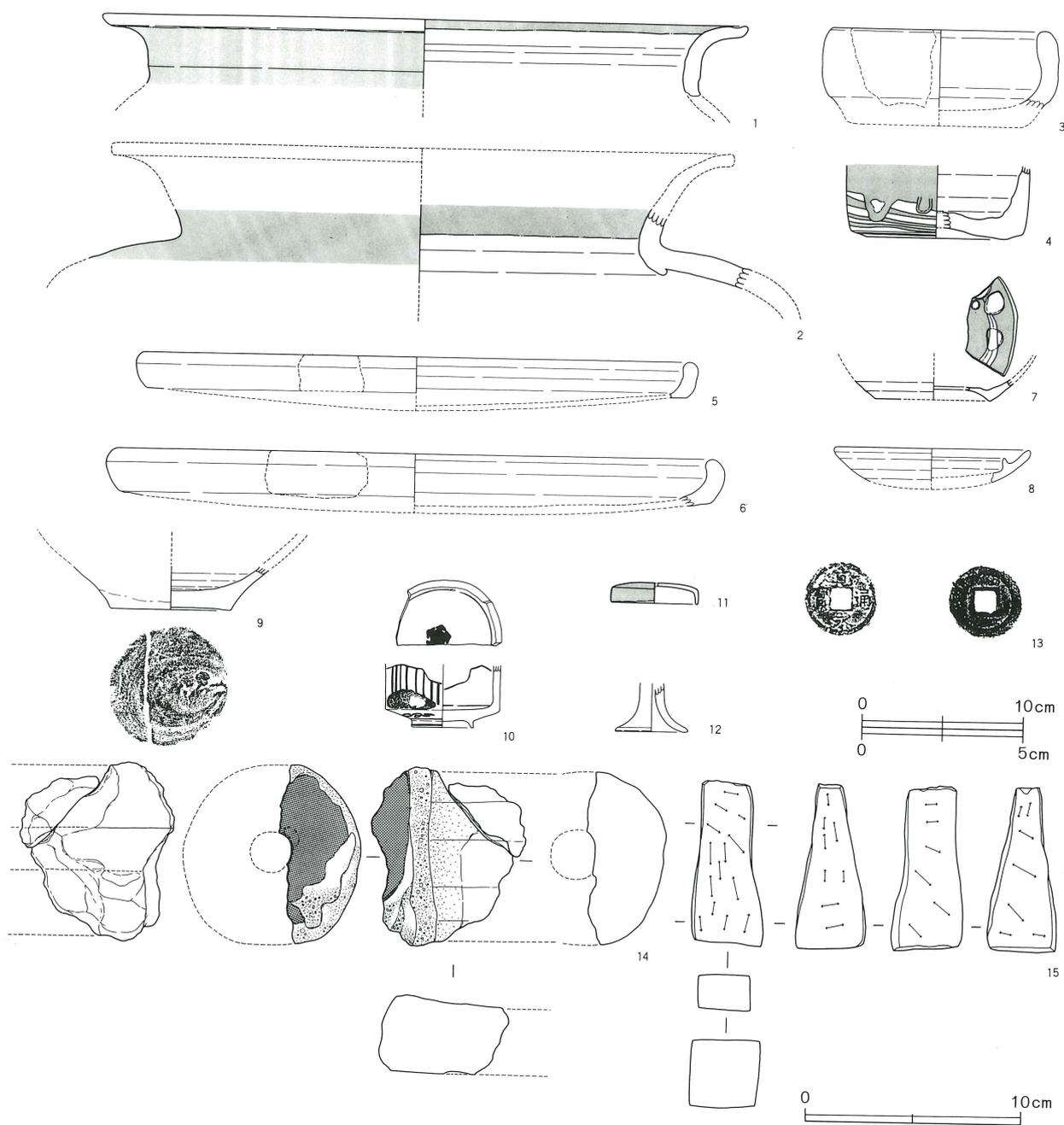
ク その他

平成8年度調査区の出土遺物には中世以降と思われるものが若干あり、第38図に示した。この項でその概要を述べる。常滑と思われる大甕の口縁部と頸部の破片は2点掲載したが、これ以外に図示の困難な破片が数点ある。1は推定口縁部径40.0cm、残存部高4.3cmで、口縁部は大きく外反する。口唇部内面がつまみ出しのためゆるくへこむ。外面には緑灰色の釉がかかり、口縁部内面はアバタ状に釉がのる。第1号井戸出土。

さをもつものと思われる。この河川跡には近世までの遺物が埋土の中に含まれていたため、近世以降にも生きていた河川跡と考えられる。第3号溝跡との関係や、浅間山B軽石（西暦1107年噴出）が川が中位まで埋まった時点で堆積したと思われる層に大量に混入する点から、古代の河道に近世以降の河道が重複している可能性もある。古墳時代～古代の土器も出土しているが、細かい年代まで把握できるような大きな破片はない。

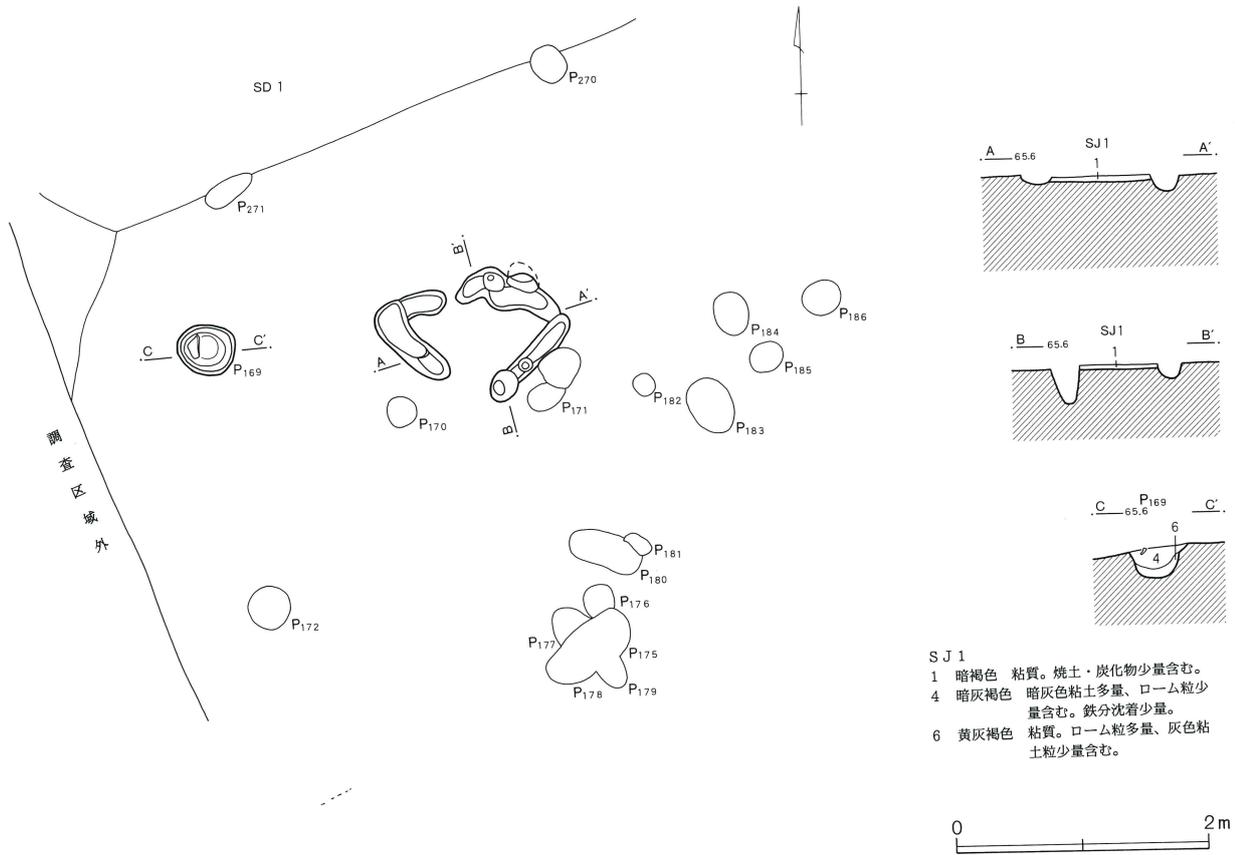
2は推定頸部径29.6cm、残存部高4.8cmで、肩部～胴部上位が大きく張り出す。頸部外面緑灰色の釉、肩部外面と頸部内面は釉はアバタ状。第17号溝跡出土。3は中くらいの鉢状の器であるが、器壁が厚く、内湾する器形。赤褐色の色調で、素焼きである。推定口径13.5cm、残存部高4.8cm。2-68グリッド出土。5・6も同じ色調・焼成で、高さの低い焙烙状の器で、第24号溝跡出土である。5は推定口径34.0cm、残存部高2.2cm。

第38図 平成8年度調査区の古代～近世出土遺物



6は推定口径37.0cm、残存部高2.9cm。4は白い地に褐色の釉をハケ塗りする器で德利状のものと思われる。底径10.6cm、残存部高4.6cm。河川跡出土。7は皿状の器高の低い器と思われ、灰褐色の地に、内面には褐色の釉を薄くかけた後、白い釉を数滴落とすようにのせる。推定底径7.2cm、残存部高1.4cm。河川跡出土。8は灯明皿の身の方であり、灰色の地に褐色の釉が薄く全面にかかる。推定口径12.2cm、残存部高2.1cm。第24号溝跡出土。9は素焼きの中型の甕のような土器の底

部であろう。色調淡褐色で焼成良。ロクロ整形で、底面も回転糸切り離し未調整である。底径7.5cm、残存部高2.8cm。第4号竪穴状遺構出土。10は筒状の湯呑み茶碗と思われる。白の地にやや薄い藍色に発色した絵の具で、外面には樹木の一部のような条線と茂みのような表現を描き、内面には底面周縁に円、中央にコンニャク印判による五弁花がある。底部径7.1cm、残存部高3.9cm。第24号溝跡出土。11は葉か紅の入れ物の蓋状のものと思われる。白地に外面だけこげ茶色の釉をかけ、



表面ガラス質にする。推定口径5.4cm、器高1.25cm。第24号溝跡出土。12は小型のひょうそくの脚台部であろう。白地で透明釉を外面だけかけてガラス質に仕上げる。脚裾部径4.6cm、残存部高3.0cm。第24号溝跡出土。1・2は12世紀末頃（浅野晴樹氏ご教示）、9もおそらく中世初期前後、その他はおおむね江戸後期～末期あたりであろう。

土器以外の遺物としては、羽口・砥石・古銭等がある。羽口（第38図14）は河川跡上層の出土品で、残存率は10%程度の小さな破片である。先端部の面は約半分残っている。厚みは3cm前後で、送風のための孔は径約2cm、羽口全体の径は約8cm程度を想定できる。

2 平成9年度調査区

(1) 縄文時代

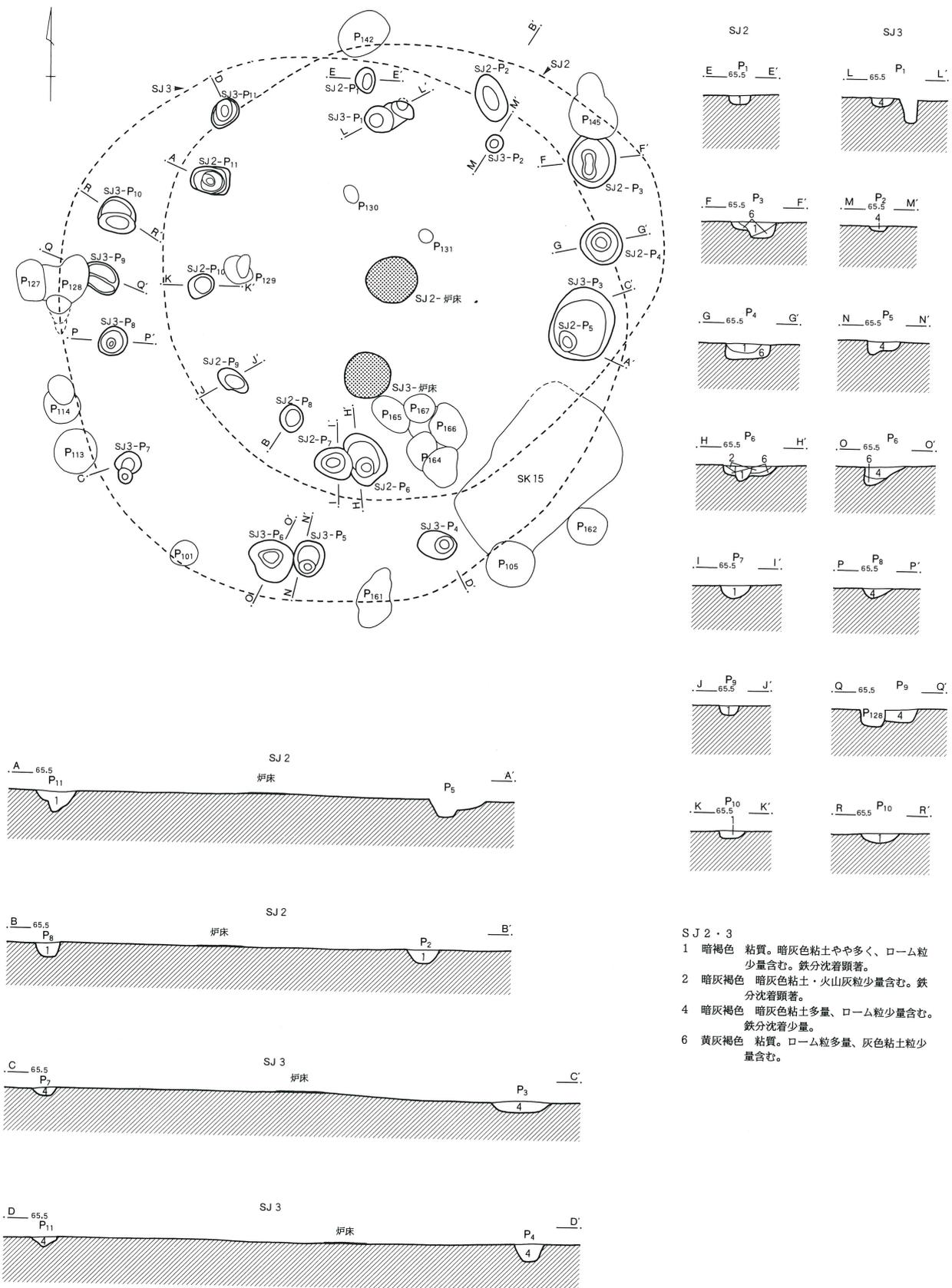
ア 竪穴住居跡

平成9年度調査区には、縄文時代の竪穴住居跡と考えられる炉跡の痕跡や柱穴が数か所あったが、このうち可能性の高い3軒分を住居跡として扱い、記述して

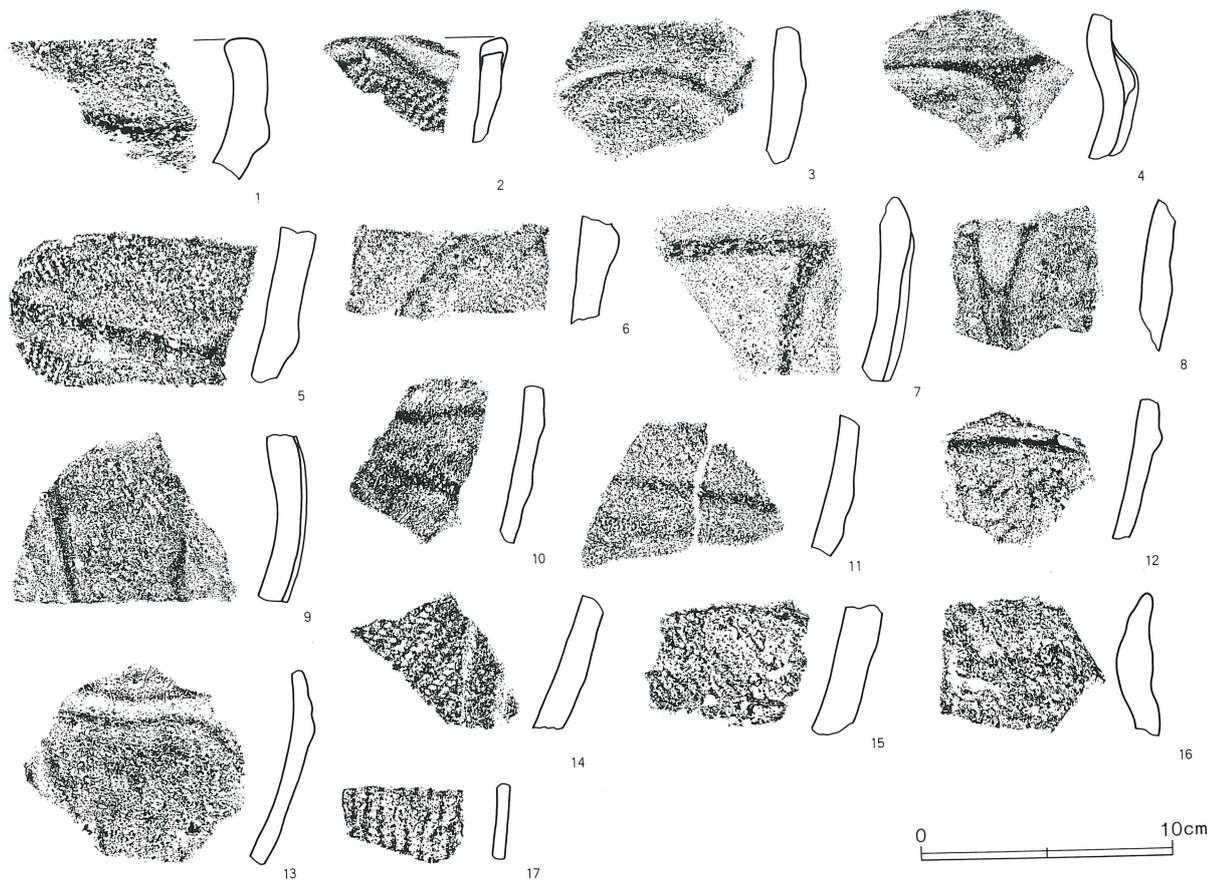
先端部からの筒部の残存する長さは約7cmしかない。先端部外面には鉄滓が薄くこびりついており、その周囲は被熱して溶けアバタ状に変質している。その周囲は幅2cm程度が被熱のため変色している。内面はオレンジ色だが、被熱の激しい部分はエンジ色に変色している。砥石（第38図15）は側面の四面がよく使われており、すべすべの感触である。残存する長さ7.5cm、幅3.2cm、厚さ3.1cm。重量99.97g。砂岩製。表面採集品である。古銭（第38図13）は寛永通宝で、径2.3cm、中央の孔は6.5mm四方である。裏面には文様はない。押しつぶされたらしく歪んでいる。重量1.59g。第8号溝跡出土。羽口・砥石は古代のものと考えられる。

おく。ただし、調査の過程で住居跡と認定したため、直接伴う遺物はなく、対応するグリッド出土の少量の土器を住居跡に伴う可能性のあるものとするに留ま

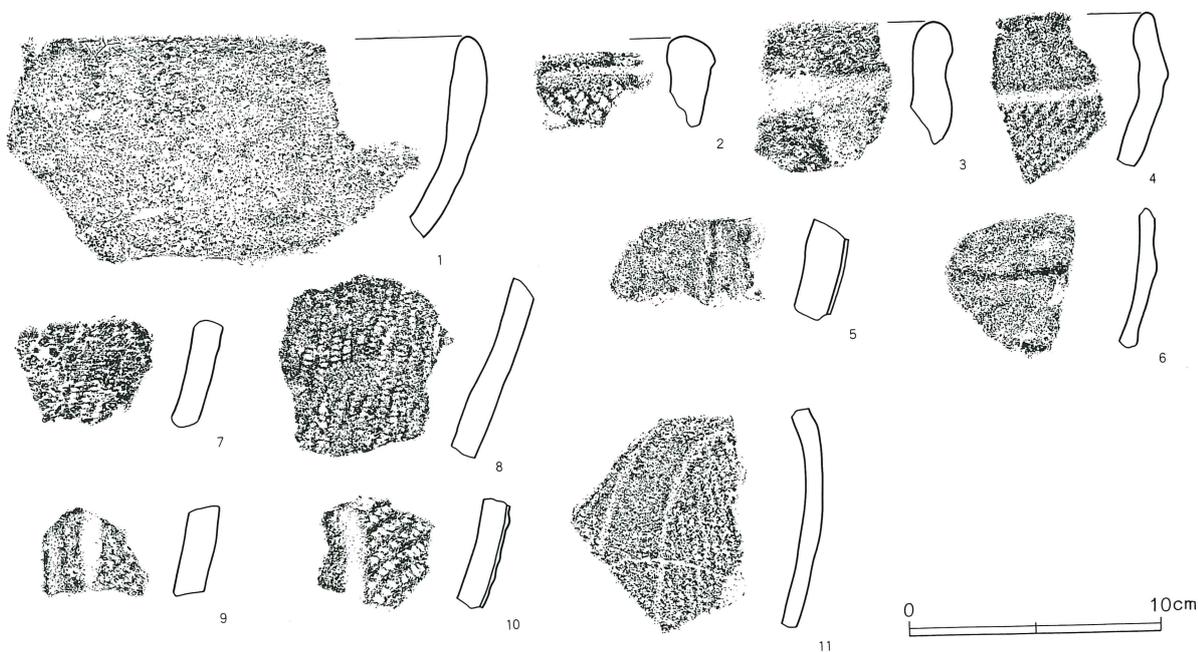
第40図 平成9年度調査区第2・3号住居跡



第41図 平成9年度調査区出土縄文土器(1)(第1号溝跡)



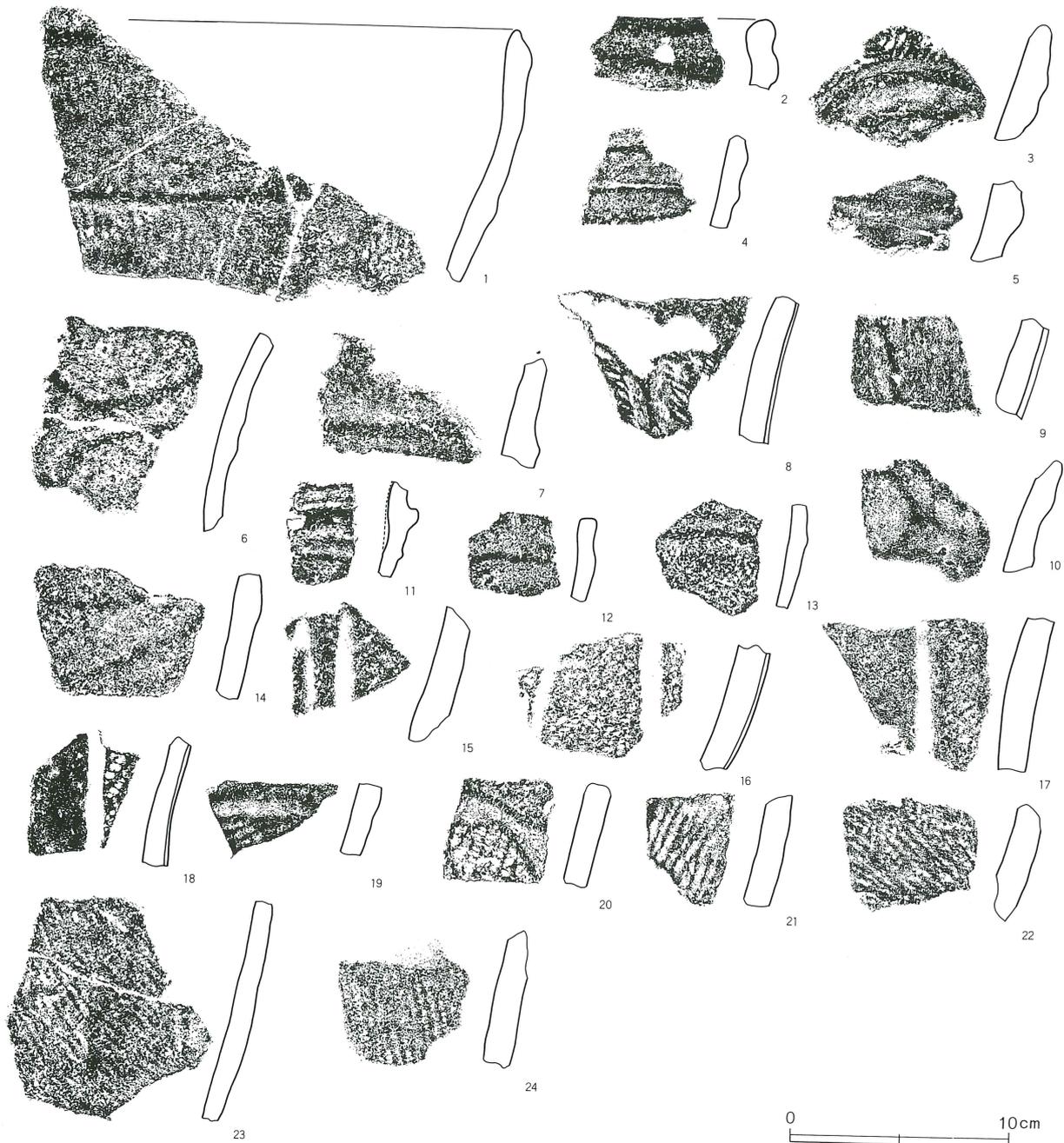
第42図 平成9年度調査区出土縄文土器(2)(第13号土壌)



る。炉跡の検出状況から考えると、遺構確認面はすでに縄文時代以前の段階の堆積層中になっていたと思われるが、調査区の縄文土器の分布状況や柱穴と思われ

るピットの集中度等から、住居跡の所在は確実にあったと思われる。以下に3軒について個別に述べる。

第43図 平成9年度調査区出土縄文土器(3)(柱穴)

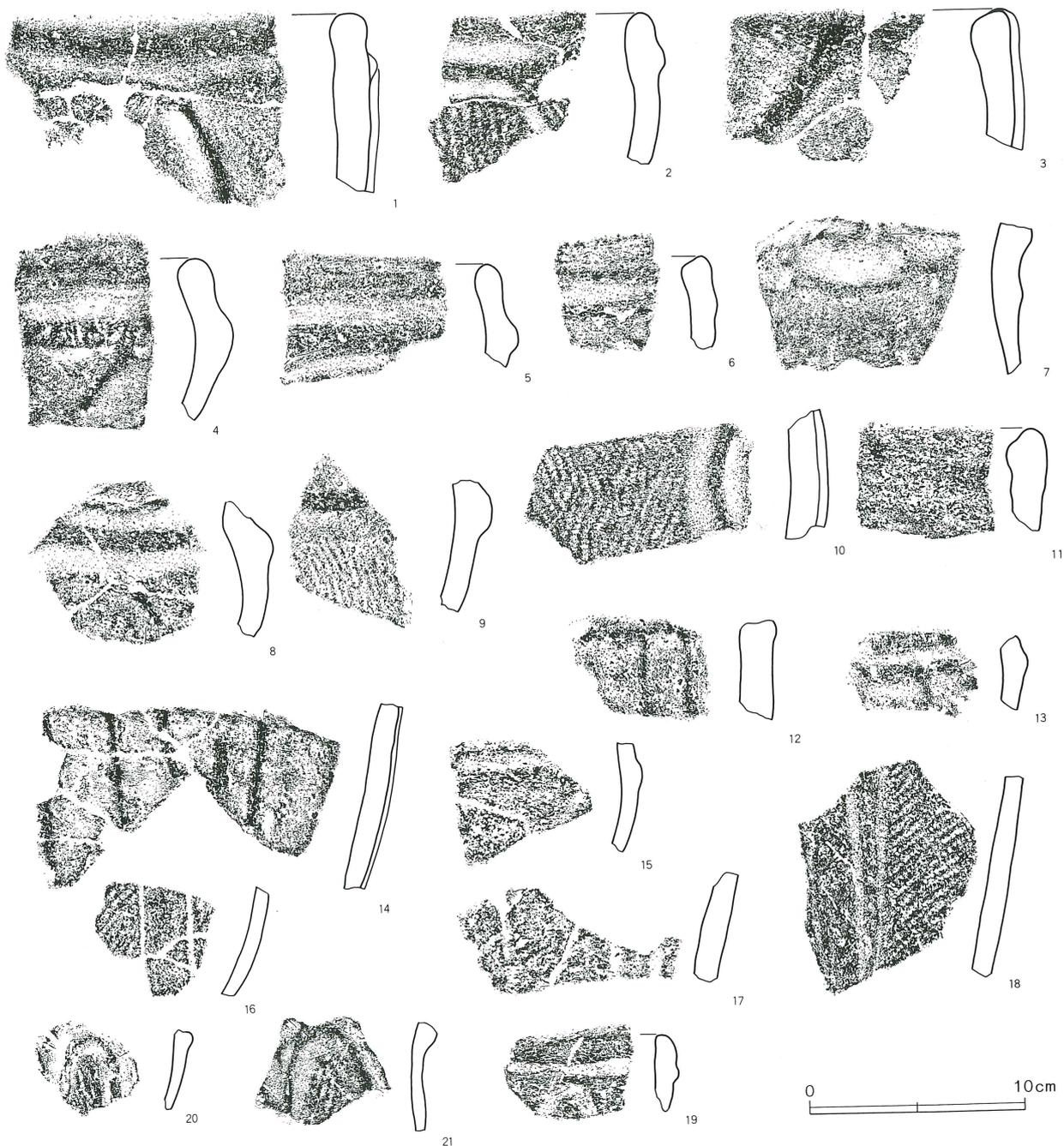


第1号住居跡(第39図)

第1号住居跡は、調査区東壁から南西に約42m、北壁から南東に約4m、第1号溝跡の南約1.4mの位置に確認された炉跡と、その東1.2mの位置にあり、深鉢の破片(第43図1)が埋襲として入っている第169号柱穴を根拠に想定した。しかし、周囲の柱穴は炉跡を中心として半径3m程度の近傍にはあまり多くなく住居跡に付随するものを特定するのは困難なので、ここではとりあえず炉跡と第169号柱穴の平面図・断面図を

示しておくに留める。炉跡は、長径1.1m、短径60cmの不整台形の範囲の中に、厚み4cm程度の弱い焼土・炭化物包含土層が認められ、その周囲に石を抜き取ったような幅15~30cm、深さ7~18cmの細い溝がある。周囲の柱穴は不整五角形のような位置取りになるので、浅いものが多いが、この住居跡の柱穴として6~7本を想定すれば、径約5mの円形に近い住居跡となる。

第44図 平成9年度調査区出土縄文土器(4)グリッド



第2号住居跡 (第40図)

第2号住居跡は、調査区東壁の南西約5m、北壁の南東約5.5mの位置にある炉跡を中心とし、1.5~2m離れた位置に所在する11本の柱穴で構成されると想定したものである。したがって、径4.5~5.3m程度の不整円形の形態の住居跡となる。炉跡は焼土や灰等の

堆積層が残っておらず、炉床のみの確認で、長径55cmである。11本の柱穴も、7~20cmの深さしか残っておらず、実際の床面よりも15cm前後下がったレベルで確認していることになると思われる。

第3号住居跡 (第40図)

第2号住居跡の炉跡から南南西に55cmの位置に、もう一つ炉床のみの炉跡が確認されている。第3号住居

跡は、第2号住居跡と同様に、この炉跡付近を中心として径5.5~6mの円形に納まる柱穴11本により想定

した。第2号住居跡は炉跡が住居のだいたいの真ん中に考えられたのに対し、第3号住居跡は住居中央よりやや南に寄った位置に想定していることになる。2軒の住居跡で共有される柱穴を考慮していないため、住居跡の相対的位置もやや南西方向へずれている。柱穴の深さは5～20cmで、やはり床面想定レベルより15～20

イ その他

ここでは、平成9年度調査区出土の縄文時代の遺物を一括して扱う。縄文土器を拓影図等で示したが、出土位置の区分にしたがって4枚の図に分けて図示した。以下、原則的には挿図配列順に述べる。なお、摩滅が激しいため、不明瞭な破片が多いことを付記しておく。

まず、最初に第1号溝跡に流れ込んだ土器を取り上げる(第41図)。1～3は口縁部破片、4は口縁部直下と思われる破片であり、隆帯または微隆起線が横走あるいは垂下して口縁部を胴部から区画するものである。2には地文の縄文が見え、LR単節縄文の縦転がしかと思われる。5～13は、同じく隆帯または微隆起線で地文の縄文が区画される胴部上半の破片である。8・9のように懸垂文となるものもあるが、斜め方向に走り、渦巻きや振幅の大きい波形の一部になりそうなものが多い。14はやや幅広の沈線2本の懸垂文で、沈線の間は地文の縄文が磨り消されている。地文はRL単節縄文の縦転がしであろうか。15～17は縄文だけの土器であるが、16ははっきりしない。9・12・15・17も地文の縄文はRL単節縄文の縦転がしと思われる。

次に、第13号土壇出土土器(第42図)である。あまり多くはなかったが、ここではむしろ沈線区画の土器が多いようである。1は無文の口縁部で浅鉢かもしれない。2～4は口縁部直下に横走する沈線で下の縄文を区画する口縁部破片である。5・6は微隆起線の破片で、5は懸垂文、6は横走する。7・8は縄文のみの破片で、地文はRL単節縄文の縦転がしである。9・10は幅広の沈線の懸垂文で磨消縄文となるタイプであろう。11も2本の沈線がカーブしながら垂下するもので沈線間は地文が磨り消される。

第3に、柱穴出土土器(第43図)である。1・2は

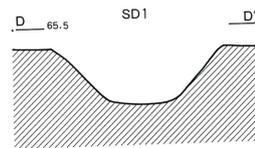
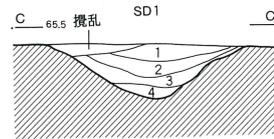
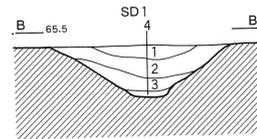
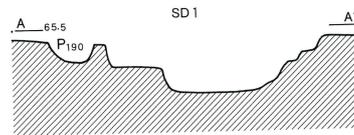
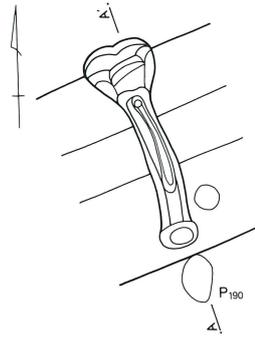
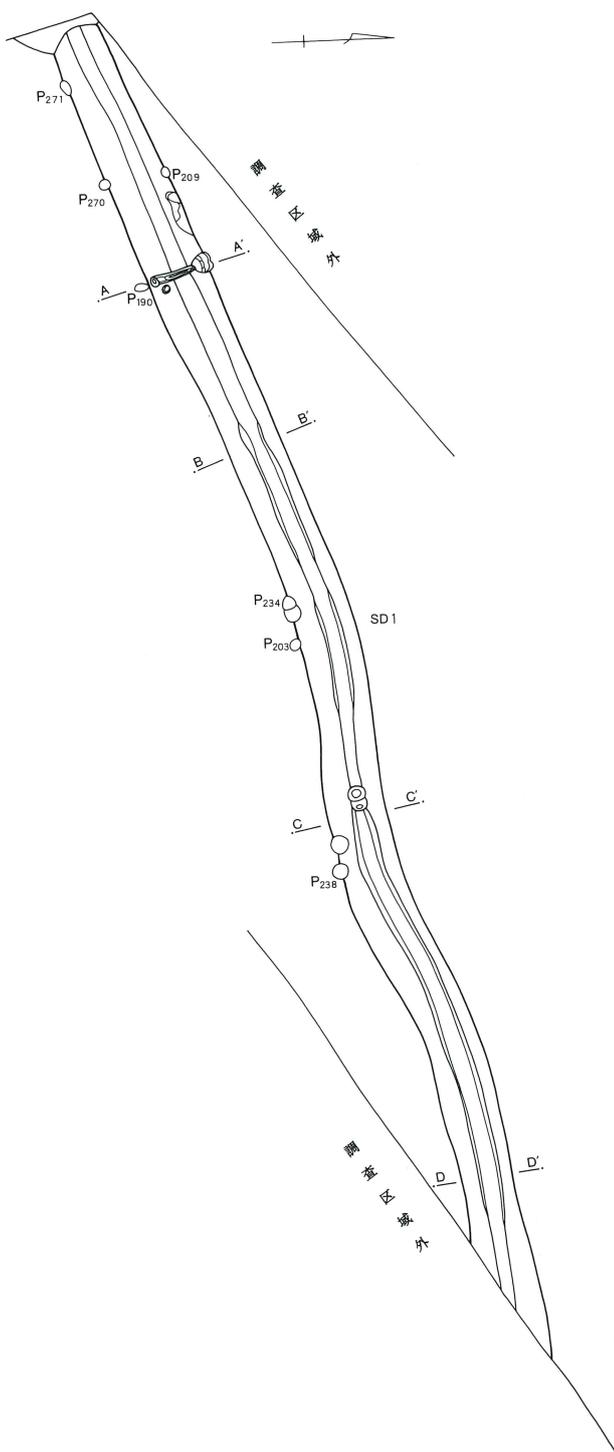
cmくらいは下の面で確認していると思われる。

なお、この2軒とも確実に伴う縄文土器がなく、所在位置に該当するグリッド出土土器からしか時期の想定はできず、縄文時代中期後半加曾利EⅢ式以降ということになろう。

口縁部、3～5は口縁部直下の破片で、いずれも横走する微隆起線で口縁部と胴部を区画するものであろう。2は波状口縁と思われる。6～14は胴部上半の破片で微隆起線の流れが横走(7・11・12・13)、弧状(6・10・14)、懸垂文(8・9)となるものである。15～18は幅広の沈線を懸垂文とし、磨消縄文が多用される。19・20も微隆起線の土器片であるが、強いナデが付帯して器面がへこむもの、21～24は縄文のみの破片である。ここでも地文の縄文はRL単節縄文(18・22～24)が主体であろうが、3・8のような無節縄文、19～21のようなLR単節縄文と思われるものもある。出土位置は1は第169号、2は第204号、3は第230号、4は第248号、5は第25号、6は第84号、7・22は第234号、8は第15号、10は第111号、11は第78号、12は第53号、13は第256号、14は第160号、15は第269号、16は第27号、17は第239号、18は第21号、19は第157号、20は第143号、21は第114号、23は第15号柱穴である。ほとんどが流れ込みであろう。

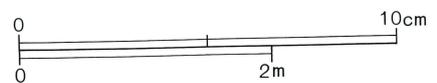
最後にグリッド出土土器である(第44図)。1～6は口縁部破片で、隆帯または微隆起線で区画するもので、横走と斜めの線を構成する7～15は胴部上半～中位の破片で、隆帯または微隆起線で横走または懸垂文となるもの、16～18は沈線2本の懸垂文で、2本間の地文を磨り消す。19は幅広の沈線を横に引き、その下に波状の区画文を構成するものであろう。20・21は、やや高まりがある細い隆線で弧状に区画するものである。出土位置は7～55グリッドが最も多く、1・3～6・9・12・14・15・19・21の11点である。2・8は8～54グリッド、7は6～56グリッド、10・11は7～54グリッド、13は8～55グリッド、17は7～56グリッ

第45図 平成9年度調査区第1号溝跡



SD1

- 1 暗茶褐色 粘質。火山灰粒・焼土・炭化物少量含む。鉄分沈着顕著。
- 2 暗褐色 粘質。火山灰粒微量、焼土・炭化物少量含む。鉄分沈着。
- 3 暗褐色 粘質。暗灰褐色粘土・焼土少量含む。炭化物層を含む。鉄分沈着。
- 4 暗黄褐色 暗灰褐色粘土・ローム粒多量含む。



ド、18は6-57グリッド、20は6-55グリッド、16は13-45グリッド、第43図9・24は13-46グリッドである。これら以外にも図示を断念した土器は多いが、この4枚でおおよその傾向がわかる。

この4枚の図に示した一群には、沈線区画を特徴とする加曾利EⅢ式土器と、微隆起線の区画を特徴とする加曾利EⅣ式土器のそれぞれがあり、後者が主体に

(2) 古墳時代以降

ア 溝跡

第1号溝跡 (第45図)

平成8年度調査区においては溝跡群が集中的に検出された区域があったが、平成9年度調査区では、わずか1条しか確認されていない。

第1号溝跡は調査区東部を東西方向に縦断するように走っており、東は調査区南壁から外に伸びていき、西は河川跡の部分で終わっている。検出された長さ37.5m、最大幅1.7m、深さ45cmを測る。わずかに蛇行しているが、溝のおおよその方向はN-73°-Eで、北西に向っている。溝底面の標高差からも西から東に流れる

イ 土壌 (第46図)

平成9年度調査区では、土壌16基が検出された。調査区東部の柱穴群の集中する区域に3基、河川跡を挟んだ調査区中央部から西部にかけての区域に13基確認されている。このうち、柱穴群中の3基中2基につ

第1号土壌

第1号土壌は、調査区の最も西に所在する土壌で、調査区西壁から東へ約43mの位置にあり、調査区南壁際に検出された。一部が調査区外に出ている。北側に径60cm、深さ10cm程度のピット状掘り込みが重複して

第2号土壌

第2号土壌は、第1号土壌の東北東約12mの位置にある。この位置から東へ約20mの位置までの間に第2~12号および第16号土壌の12基が集中しており、土壌群を形成している。しかし、特定の主軸方向に揃って

第3号土壌

第3号土壌は、第1号土壌の東約14m、第2号土壌の南西約5mの位置にある。長径1.27m、短径70cm、

なっていた。この両型式に属する遺構は本来多かったと考えられるが、遺構確認面がすでに旧石器時代の層であったため、大部分の土器はグリッド出土となってしまったようだ。しかし、第2・3号住居跡よりやや西寄りに土器が集中する傾向があり、この辺を中心に本来の住居跡群の主体が所在していた可能性を指摘することができる。

ことが確認できる溝である。河川跡の落ち込みの崖面から約7.5mの位置に堰状施設の痕跡かと思われる溝状の掘り込みがあった。断面で見ても、板材のようなものが付設されるとともに開閉装置の設置されたような変則的な掘り込みが伴っている。この溝跡からはまわりから流れ込んだと思われる縄文土器片の出土量が多かったが、土師器片も伴っており、古代の溝跡と考えてよいであろう。

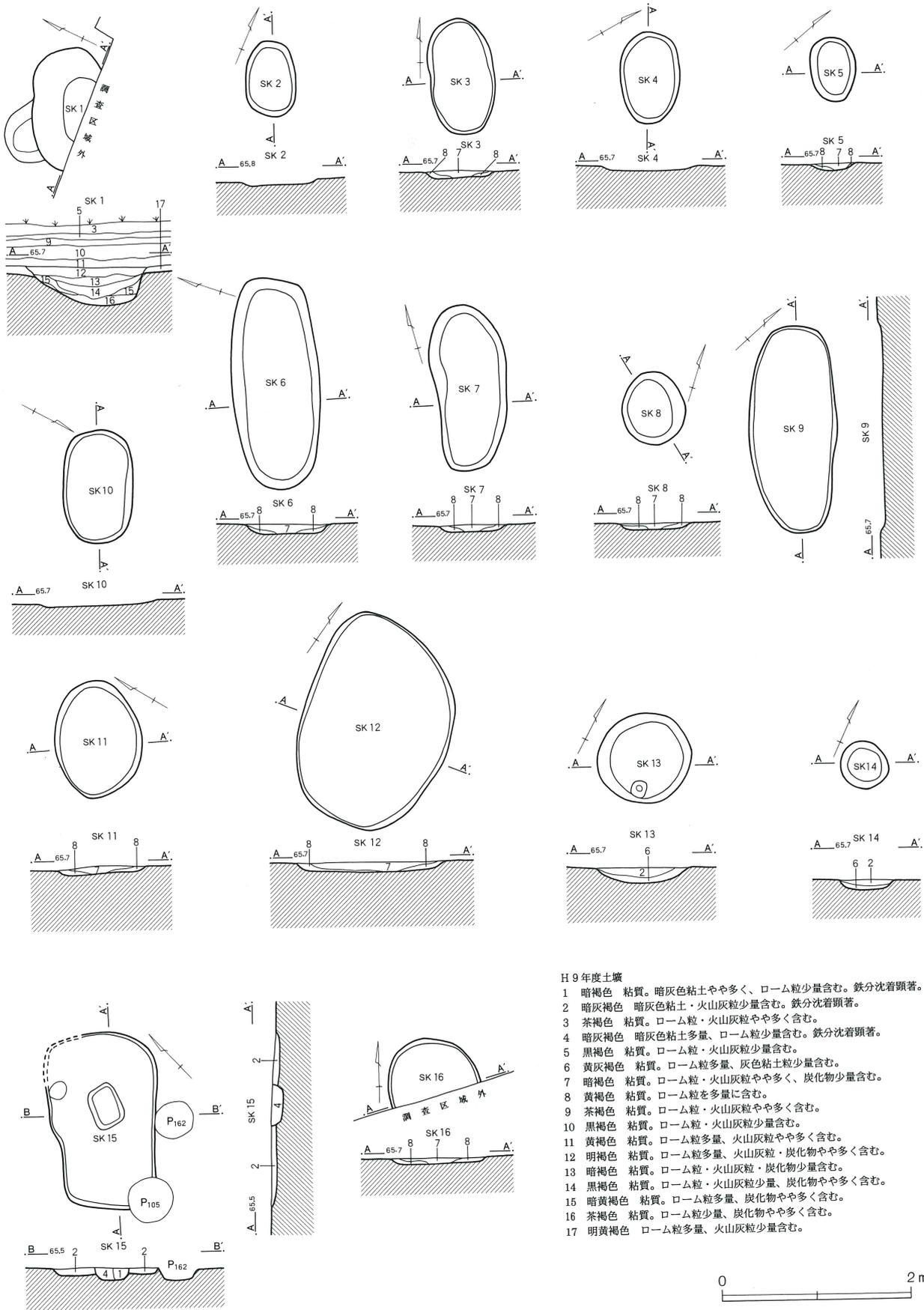
いては縄文時代に形成された可能性があるが、調査区中央部・西部のものは概して浅く、遺物もないため、古代に遡るものはほとんどないと思われる。ここではこれらの土壌を一括して記述することにしたい。

いる。長径1.3m以上、深さ約35cmを測る、倒卵形の土壌である。主軸方向はN-56°-Eで北東である。古代に遡る可能性もあるが、確実ではない。

いるわけでもないので、形成時期はかなり幅がありそうである。この土壌は、長径83cm、短径58cm、深さ5cmを測る、楕円形の浅い土壌である。主軸方向はN-25.5°-Wで北北西である。中世以降の時期であろう。

深さ10cmを測る、楕円形の浅い土壌である。主軸方向はN-9°-Wで真北に近い。中世以降であろう。

第46図 平成9年度調査区土壌



H9年度土壌

- 1 暗褐色 粘質。暗灰色粘土やや多く、ローム粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 2 暗灰褐色 暗灰色粘土・火山灰粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 3 茶褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒やや多く含む。
- 4 暗灰褐色 暗灰色粘土多量、ローム粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 5 黒褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒少量含む。
- 6 黄灰褐色 粘質。ローム粒多量、灰色粘土粒少量含む。
- 7 暗褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒やや多く、炭化物少量含む。
- 8 黄褐色 粘質。ローム粒を多量に含む。
- 9 茶褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒やや多く含む。
- 10 黒褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒少量含む。
- 11 黄褐色 粘質。ローム粒多量、火山灰粒やや多く含む。
- 12 明褐色 粘質。ローム粒多量、火山灰粒やや多く含む。
- 13 暗褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒・炭化物少量含む。
- 14 黒褐色 粘質。ローム粒・火山灰粒少量、炭化物やや多く含む。
- 15 暗黄褐色 粘質。ローム粒多量、炭化物やや多く含む。
- 16 茶褐色 粘質。ローム粒少量、炭化物やや多く含む。
- 17 明黄褐色 ローム粒多量、火山灰粒少量含む。

第4号土壙

第4号土壙は、第2号土壙の東北東約5mの位置にある。長径1.08m、短径65cm、深さ8cmを測る、楕円

形の浅い土壙である。主軸方向はN-63°-Wで北西である。中世以降の時期であろう。

第5号土壙

第5号土壙は、第4号土壙の北東50cmの位置に隣接して所在する。長径70cm、短径50cm、深さ10cmを測る、楕円形の土壙である。主軸方向はN-54°-Wで北西で

ある。中世以降と思われるが、底面の形態は第2～4号土壙のような広い平らな底面と異なり、狭い底面で断面レンズ状である。

第6号土壙

第6号土壙は、第4号土壙の東約2mの位置にある。長径2.3m、短径95cm、深さ12cmを測る、楕円形の浅い

土壙である。主軸方向はN-68.5°-Eで北東である。中世以降の時期であろう。

第7号土壙

第7号土壙は、第6号土壙の南約1.5mの位置にある。長径1.75m、短径82cm、深さ8cmを測る、不整楕

円形の浅い土壙である。主軸方向はN-9°-Eで真北に近い。中世以降の時期であろう。

第8号土壙

第8号土壙は、第6号土壙の南東約2mの位置にある。長径80cm、短径70cm、深さ10cmを測る、倒卵形の

浅い土壙である。主軸方向はN-18°-Wで北北西である。中世以降の時期であろう。

第9号土壙

第9号土壙は、第8号土壙の南約1.5mの位置にある。長径2.23m、短径95cm、深さ5cmを測る、楕円形

の浅い土壙である。主軸方向はN-51°-Wで北西である。中世以降の時期であろう。

第10号土壙

第10号土壙は、第6号土壙の東約2.5mの位置にある。長径1.21m、短径78cm、深さ3cmを測る、楕円形

の浅い土壙である。主軸方向はN-61°-Eで北東である。中世以降の時期であろう。

第11号土壙

第11号土壙は、第10号土壙の南南東約1mの位置にある。長径1.25m、短径92cm、深さ8cmを測る、倒卵

形の浅い土壙である。主軸方向はN-54°-Eで北東である。中世以降の時期であろう。

第12号土壙

第12号土壙は、第11号土壙の南南東約1.5mの位置にある。長径2.35m、短径1.65m、深さ11cmを測る、

倒卵形の浅い土壙である。主軸方向はN-32.5°-Wで北北西である。中世以降の時期であろう。

第13号土壙

第13号土壙は、第3号住居跡のP₇から南西に約9mの位置にあり、柱穴群の中央付近に位置する。長径1.02m、短径95cm、深さ17cmを測る、不整円形の土壙で皿状の掘り込みである。主軸方向はN-41°-Eで北

東である。径20cm程度のピット状掘り込みを土壙南壁付近に重複する。この土壙だけは縄文土器をやや多く出土しており、縄文時代に属するものと考えられる。

第14号土壙

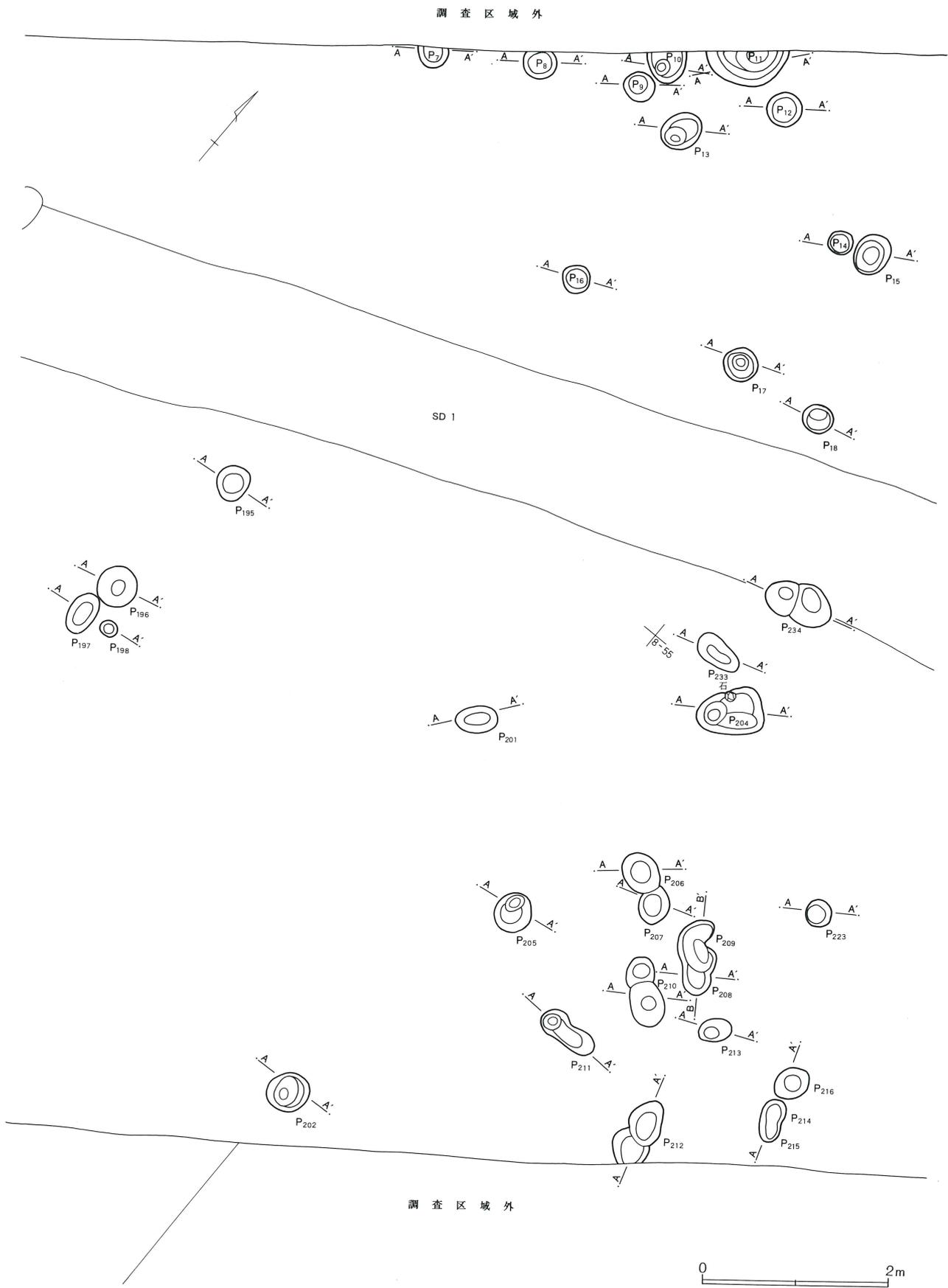
第14号土壙は、調査区東壁の南東約9.5m、調査区南壁の北西約1.5mにある。柱穴群中なので、よく見ないとまわりの柱穴と区別できないような位置である。

長径53cm、短径50cm、深さ10cmを測る、不整円形の浅い小さな土壙である。主軸方向はN-62°-Wで北西である。縄文時代に属する可能性があるが、浅いため確

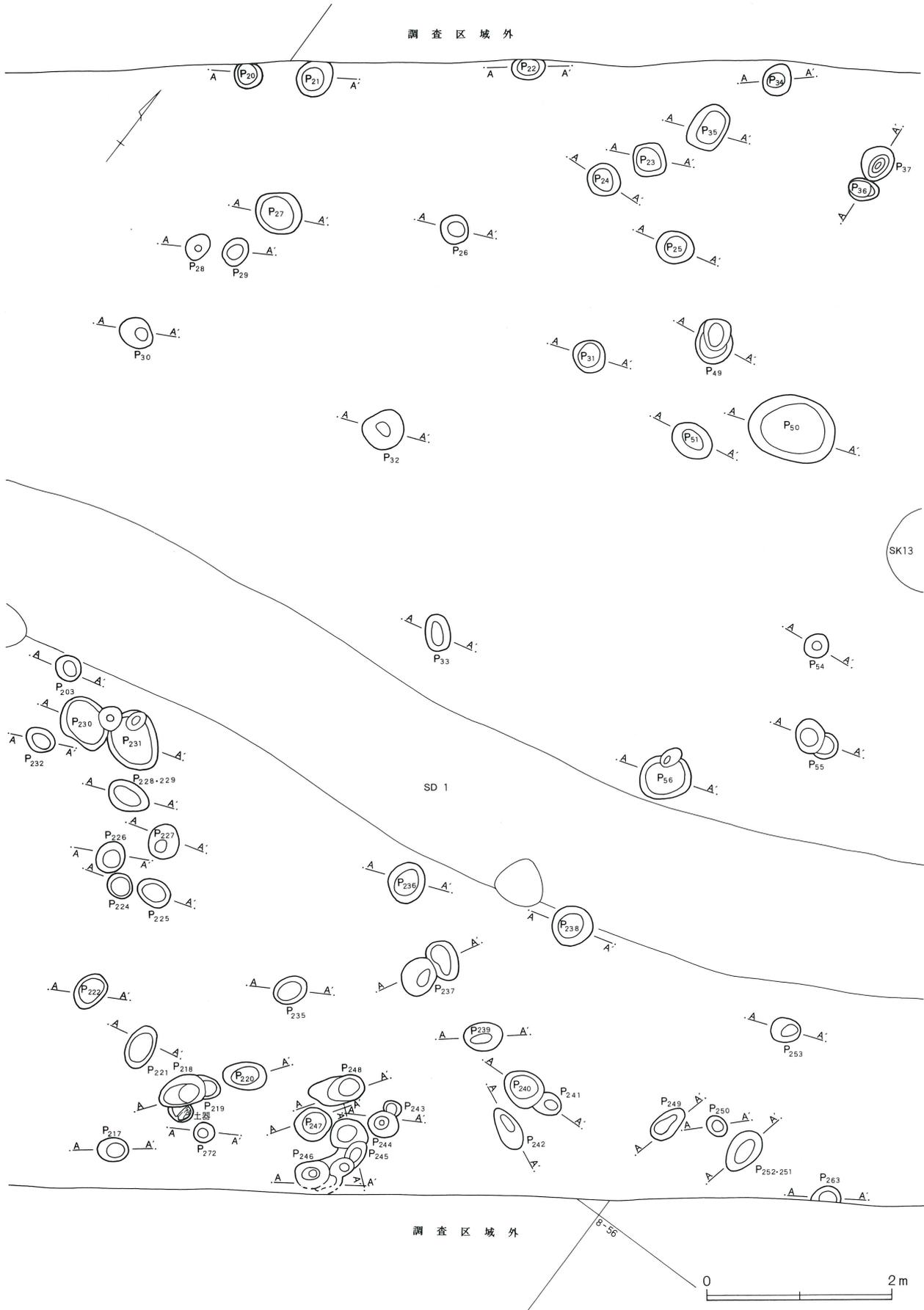
第47図 平成9年度調査区柱穴 (I)



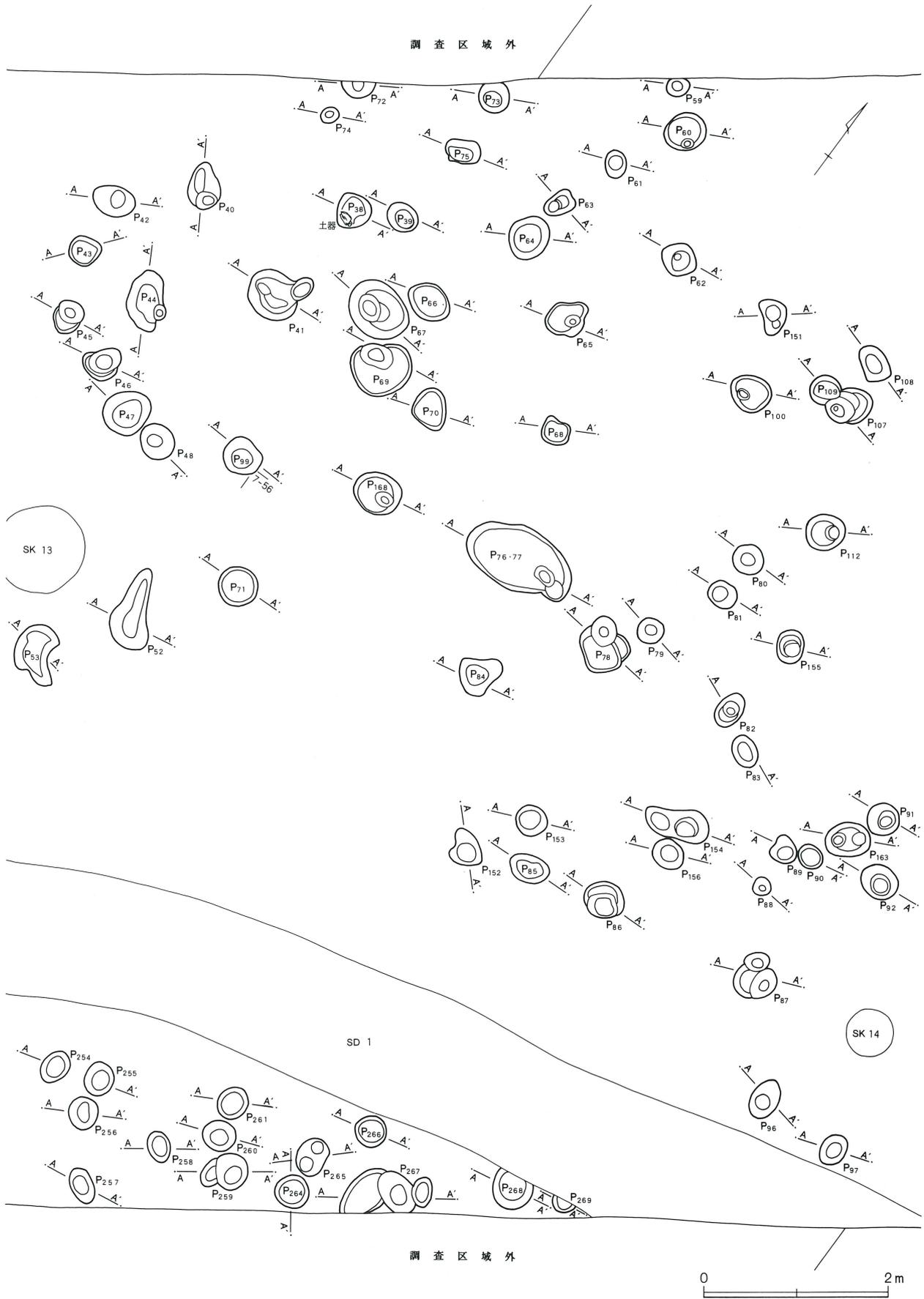
第48図 平成9年度調査区柱穴(2)



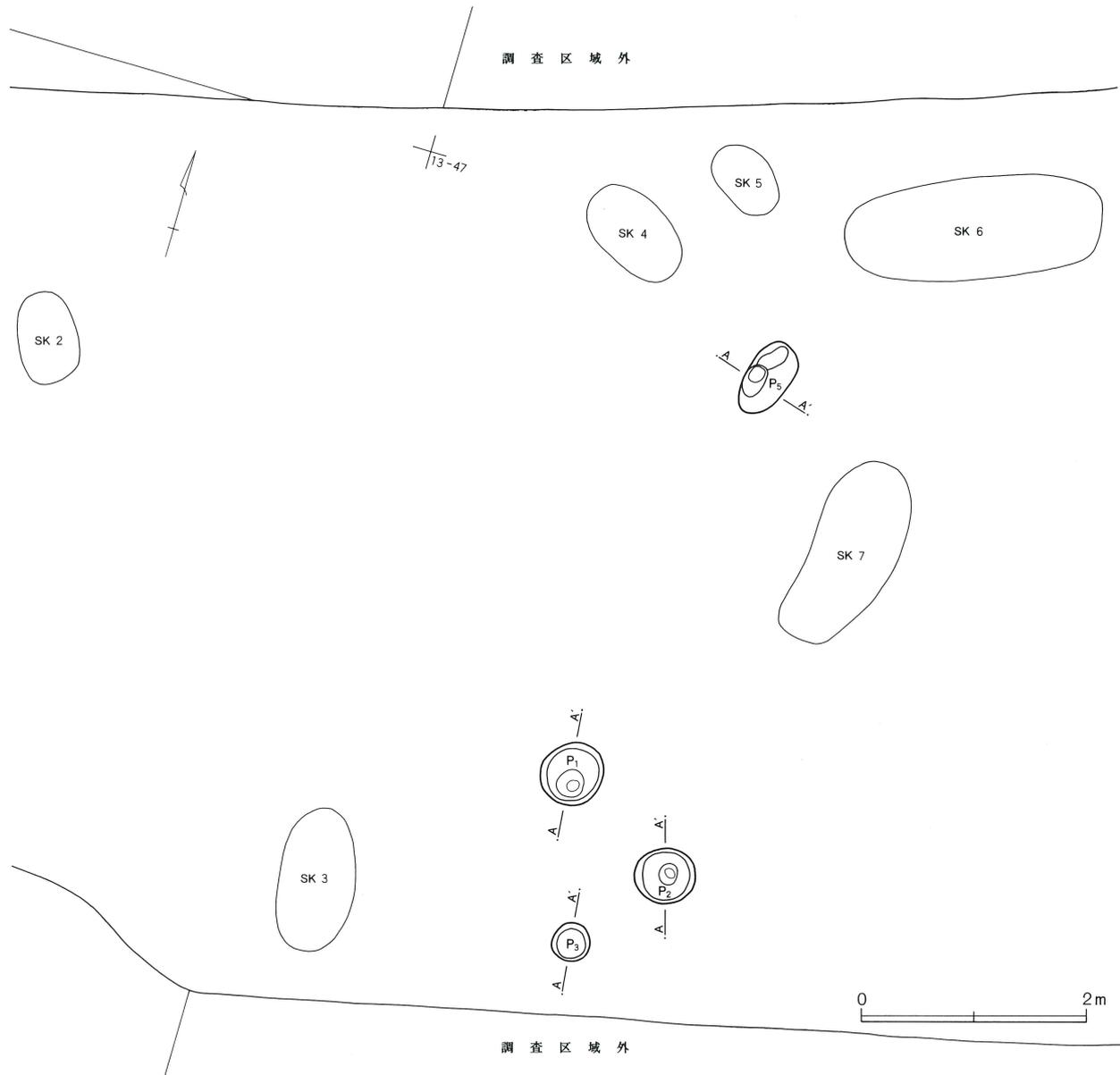
第49図 平成9年度調査区柱穴(3)



第50図 平成9年度調査区柱穴(4)



第52図 平成9年度調査区柱穴(6)



実ではない。

第15号土壇

第15号土壇は、調査区東壁の南東約4.5m、調査区南壁の北西約4mにあり、第2・3号住居跡を想定した領域の南東端の部分に納まるような位置に検出された。長径1.92m、短径1.2m、深さ8cmを測る、不整隅丸長方形の浅い土壇であり、主軸方向はN-42°-Eで

北東である。柱穴群中なので、第105号柱穴・第162号柱穴と重複している。また、土壇の中央には45cm×33cmの不整長方形のピット状掘り込みが土壇埋没以後に掘り込まれている。形態からいって縄文時代のものとはいえず、中世～近世の時期のものと考えられる。

第16号土壇

第16号土壇は、第12号土壇の南東約60cmに位置し、南半部が調査区南壁の外に出ている。検出した南北方向の長さ64cm、東西幅1.02mで、南北の長さが2倍程度だとすると、不整円形ないし楕円形の土壇となる。

深さは7cmであり、浅い。主軸方向も南北にとれば、N-17°-Wで北北西となる。やはり中世以降の時期と考えてよからう。

ウ 柱穴

平成9年度調査区においては、柱穴と考えられるピットが263本確認されているが、これらは調査区東端部から西に向って45mまでの範囲の中におさまっており、本来は縄文時代の竪穴住居跡に関するものが多かったと思われるが、古墳時代や古代以降のものと完全に区別することができるとはいえない。そこで、縄文時代から近世まで含めたものとして、この項で一括して記述しておく。また、前述した縄文時代の住居

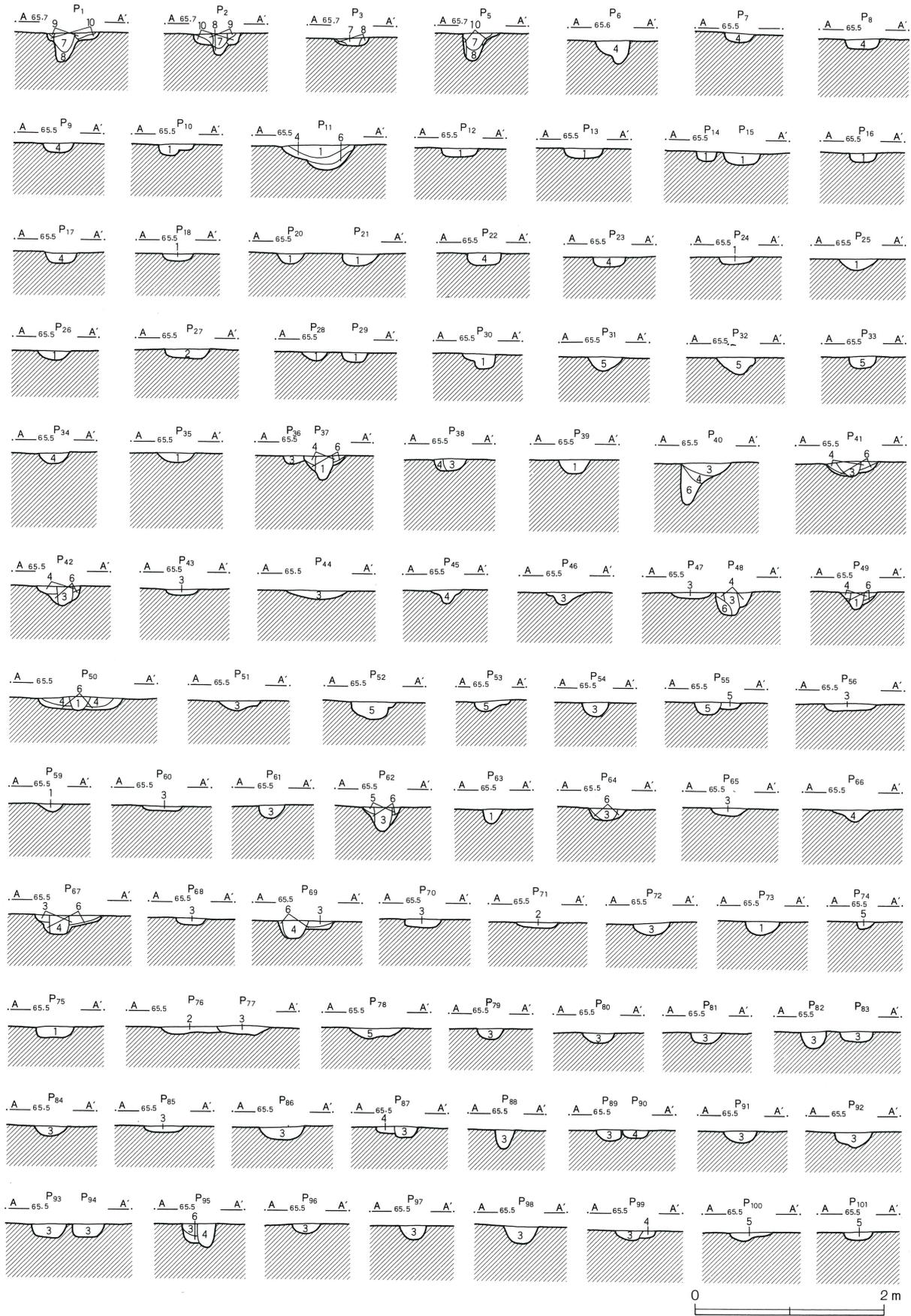
跡の柱穴と考えたものは除外してある。ほとんど土層断面も確認されているが、特定の土層断面をもつものが特定の建物となるということも指摘できるわけではない。個々の柱穴の位置と計測値は第47～55図および一覧表を参照していただきたい。なお、第4・19・57・58・126・132・133・150・262号柱穴の9本については欠番とした。

平成9年度調査区柱穴計測表

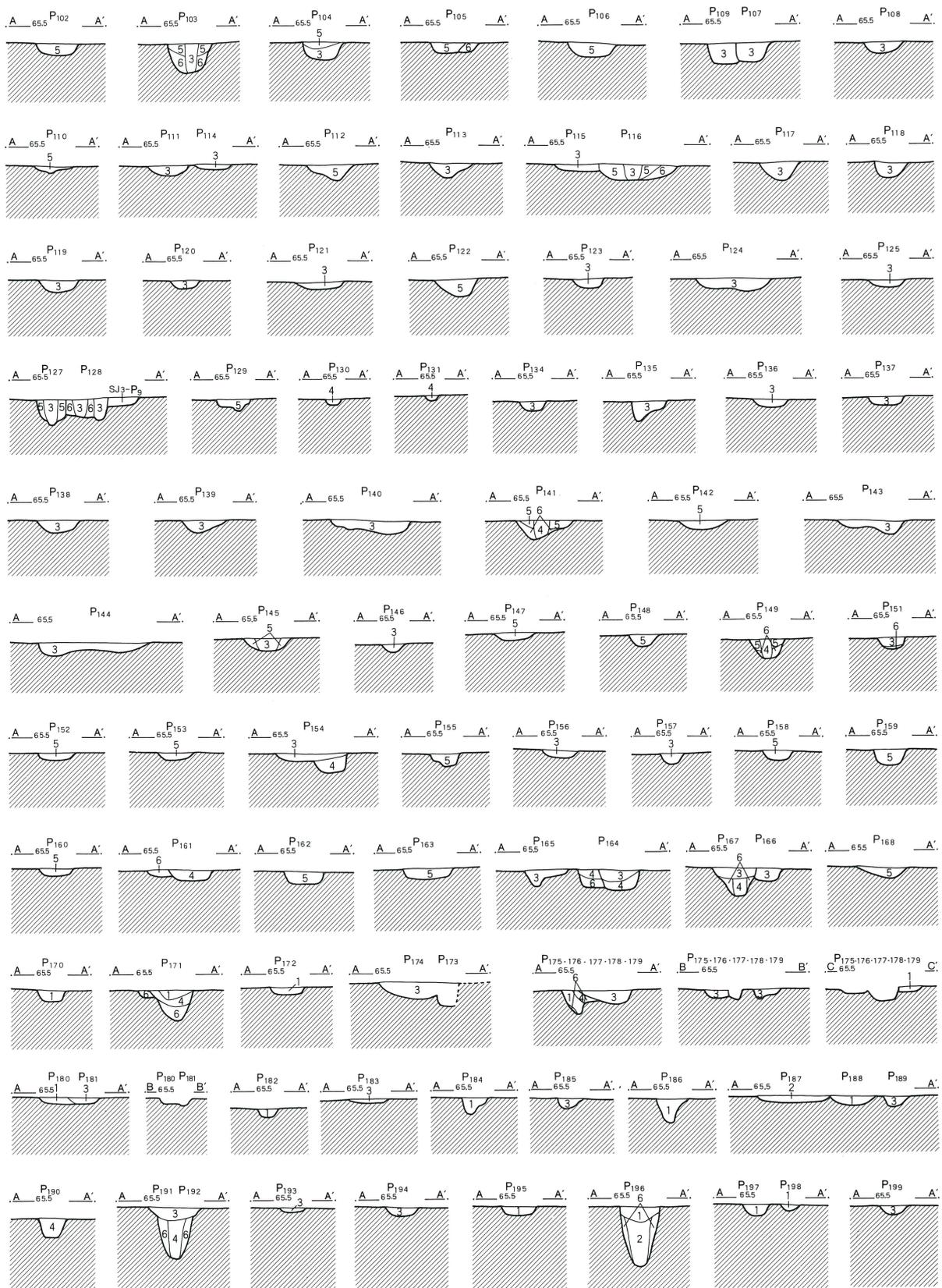
(単位: cm)

番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考	番号	最大径	深さ	備考
1	(26)	31	径59掘方	71	45	7		140	(59)	14	149と重複	207	44	12	206と重複
2	(20)	23	径56掘方	72	38	16		141	(26)	20	径62掘方	208	(34)	12	209と重複
3	35	9		73	37	14		142	55	10		209	56	14	208と重複
5	(30)	30	径72掘方	74	21	9		143	82	15	土壌?	210	50	20	穴重複あり
6	(24)	25	径46掘方	75	40	13		144	123	14	土壌?	211	(20)	30	長68採取穴
7	(34)	11		76	(125)	8	77と同一	145	69	13		212	(52)	13	穴重複あり
8	37	11		77	(125)	11	76と同一	146	28	9		213	38	8	
9	34	11		78	(61)	12	3本の重複	147	44	7		214	27	13	215と重複
10	(19)	13	径44掘方	79	32	12		148	34	12		215	25	14	214と重複
11	(46)	27	径92掘方	80	36	12		149	50	21	3本の重複	216	43	6	
12	38	10		81	33	11		151	40	13		217	35	10	
13	(24)	11	径48掘方	82	(18)	19	径42掘方	152	45	8		218	(24)	16	径53掘方
14	28	11		83	37	12		153	36	8		219	(29)	9	218と重複
15	48	13		84	50	12		154	(26)	20	長74掘方	220	49	20	
16	32	11		85	46	8		155	38	14		221	49	18	
17	(19)	13	径40掘方	86	(35)	35	径47掘方	156	38	8		222	44	10	
18	35	8		87	(38)	13	径49掘方	157	32	12		223	30	12	
20	32	12		88	22	18		158	31	10		224	30	12	
21	45	14		89	32	13		159	46	17		225	39	15	
22	38	11		90	30	9		160	45	9		226	37	13	
23	37	11		91	38	14		161	68	11		227	40	12	
24	39	9		92	44	15		162	44	13	SK15重複	228	(49)	8	229と同一
25	43	12		93	40	16		163	50	12		229	(49)	10	228と同一
26	33	11		94	35	15		164	44	21	3本の重複	230	62	7	土壌?
27	54	12		95	36	26		165	45	18	167と重複	231	68	11	土壌?
28	32	10		96	47	12		166	50	30	167と重複	232	34	12	
29	33	11		97	37	16		167	30	14	166と重複	233	54	21	
30	39	17		98	44	19		168	53	12		234	(77)	16	2本?土壌?
31	37	16		99	44	9		169	48	26	SJ1埋嚢	235	40	9	
32	46	19		100	48	10		170	28	12		236	46	5	
33	41	13		101	30	9		171	(38)	32	穴重複あり	237	(44)	13	穴重複あり
34	37	12		102	43	13		172	37	8		238	46	9	
35	53	11		103	51	31		173	(24)	24	柱採取穴?	239	44	10	
36	35	10		104	53	19		174	73	18		240	46	10	241と重複
37	(19)	26	径41掘方	105	51	11		175	(38)	15	5本の重複	241	(32)	7	240と重複
38	41	14		106	50	13		176	(25)	7	5本の重複	242	51	9	
39	38	15		107	(53)	20	4本の重複	177	(32)	11	5本の重複	243	35	20	穴重複あり
40	(24)	45	長52採取穴	108	44	12		178	(48)	25	5本の重複	244	42	17	245と重複
41	60	17	穴重複あり	109	(36)	22	4本の重複	179	(33)	9	5本の重複	245	(30)	23	244と重複
42	49	21		110	42	8		180	60	8	土壌?	246	38	23	穴重複あり
43	37	6		111	(48)	11	3本の重複	181	22	8	180と重複	247	42	8	
44	58	10	土壌?	112	44	17		182	22	10		248	(42)	18	径63採取穴
45	32	16	径39掘方	113	(26)	15	径47掘方	183	48	5		249	46	28	
46	(47)	14	穴重複あり	114	(40)	6	穴重複あり	184	36	18		250	26	10	
47	55	7		115	(50)	8	土壌?	185	29	12		251	(51)	11	252と同一
48	42	25		116	(90)	17	土壌?	186	32	25		252	(51)	12	251と同一
49	(35)	19	径50掘方	117	52	20		187	79	8	土壌?	253	33	10	
50	96	15	土壌?	118	33	18		188	46	11		254	39	10	
51	48	11		119	46	13	穴重複あり	189	34	10		255	38	11	
52	90	19	土壌?	120	32	9		190	40	20		256	37	11	
53	68	11	土壌?	121	60	8		191	(46)	52	192と重複	257	42	8	
54	30	15		122	(44)	18	3本の重複	192	57	13	191と重複	258	35	12	
55	39	14	穴重複あり	123	31	10		193	28	5		259	41	21	穴重複あり
56	58	9	土壌?	124	80	14	土壌?	194	60	10	土壌?	260	38	12	
59	27	9		125	(53)	8	3本の重複	195	40	10		261	38	9	
60	48	5		127	44	27	128と重複	196	46	60		263	34	11	
61	32	14		128	64	24	柱採取穴?	197	48	13		264	39	14	
62	42	26		129	(25)	13	径35掘方	198	21	7		265	43	12	
63	36	16		130	21	6		199	32	10		266	36	10	
64	51	13		131	16	6		200	37	10		267	(52)	24	3本の中央
65	50	7	土壌?	134	33	10		201	47	13		268	(49)	12	SD1と重複
66	52	13		135	40	21		202	(33)	25	径49掘方	269	28	19	SD1と重複
67	(32)	21	径72掘方	136	37	9		203	30	10		270	33	8	
68	32	6		137	39	10		204	(28)	28	径75掘方	271	42	12	
69	(37)	20	径68掘方	138	58	14		205	(23)	19	径45掘方	272	24	7	
70	48	7		139	55	13		206	48	11	207と重複				

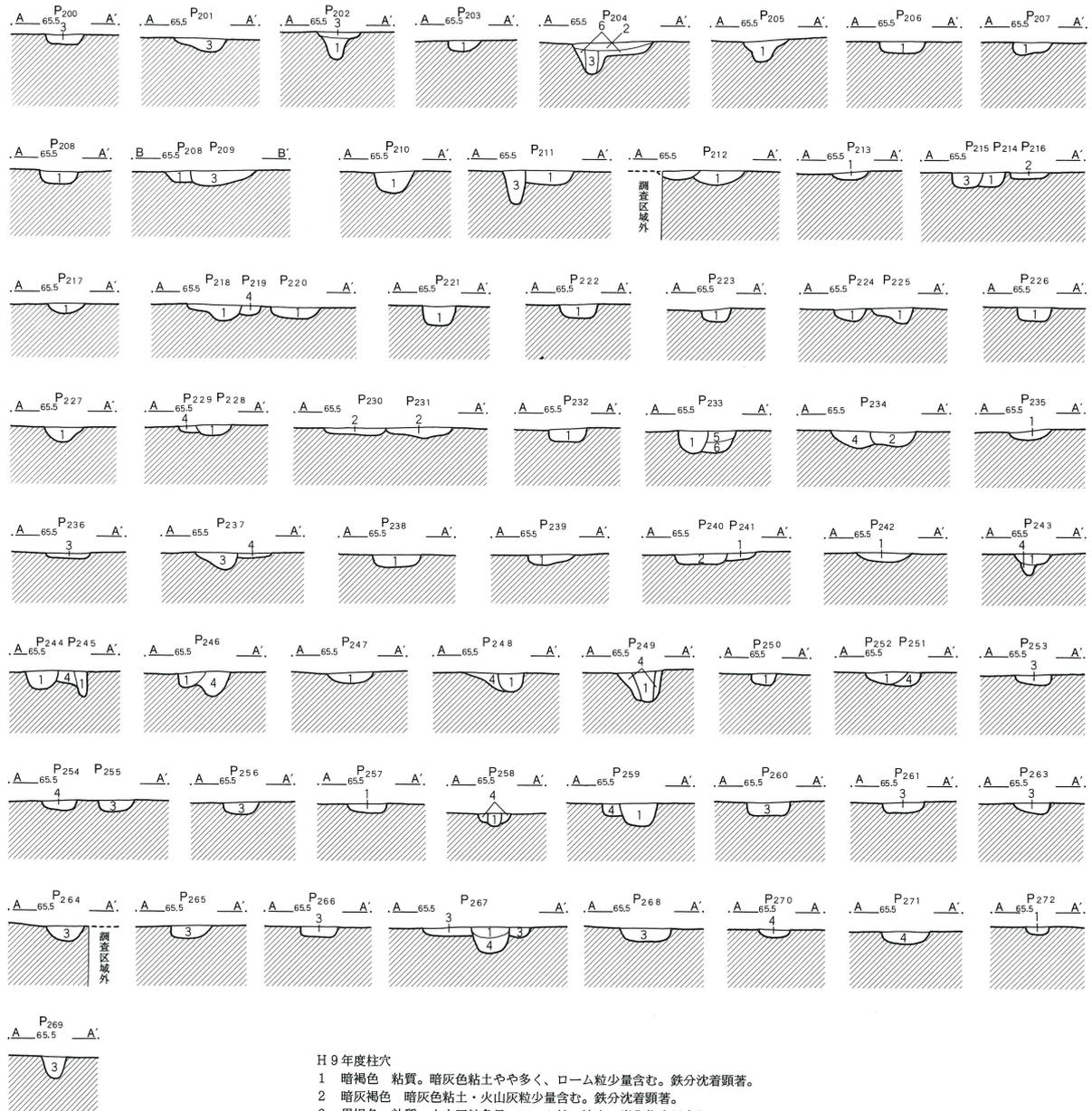
第53图 平成9年度調査区柱穴土層断面図(1)



第54図 平成9年度調査区柱穴土層断面図(2)



第55図 平成9年度調査区柱穴土層断面図(3)



H9年度柱穴

- 1 暗褐色 粘質。暗灰色粘土やや多く、ローム粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 2 暗灰褐色 暗灰色粘土・火山灰粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 3 黒褐色 粘質。火山灰粒多量、ローム粒・焼土・炭化物少量含む。
- 4 暗灰褐色 暗灰色粘土多量、ローム粒少量含む。鉄分沈着顕著。
- 5 暗灰褐色 粘質。ローム粒多量、火山灰粒少量含む。鉄分沈着少量。
- 6 黄灰褐色 粘質。ローム粒多量、灰色粘土粒少量含む。
- 7 褐色 粘質。火山灰粒・ローム粒やや多く含む。
- 8 茶褐色 粘質。火山灰粒・ローム粒・炭化物やや多く含む。
- 9 明褐色 ローム粒多量、火山灰粒少量含む。
- 10 黄褐色 粘質。ローム粒多量を含む。

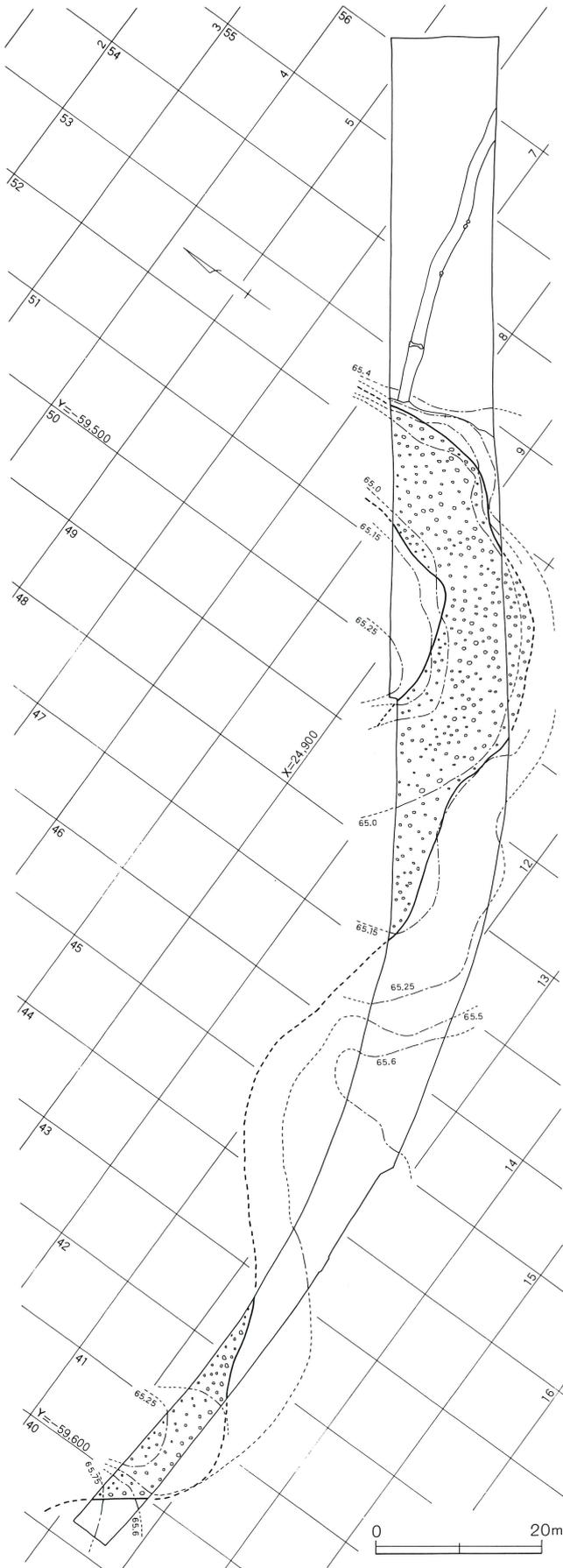


エ 河川跡

平成9年度調査区においては、本調査対象区域の西端部付近の長さ約31m分と東部～中央部の長さ66m分が河川跡の確認された領域となった。礫層が確認された部分を平均40cm程度掘り下げたが、特にそれ以外の遺構の痕跡を検出できなかったため、少なくとも縄

文時代前後から古代までの時期にかかる遺構は、この河川が流れている時点で流路の部分ではすべて破壊されてしまった、と判断してそれより下層については掘り下げていない。「中州」になるような部分もあったが、これを仮に対岸と考えれば川幅は12～14m程度とな

第56図 平成9年度調査区河川跡



り、平成8年度調査区の河川跡で推測した規模とほぼ同じとなる。したがって、この河川跡の下流は平成8年度調査区の河川跡の位置にあたることは推定しておいてよいことになり、今回の調査を通じて同じ河川跡の一部を2か所で確認したと考えておきたい。

この河川跡に確実に伴う遺物はなく、時期の判断は困難であるが、平成8年度調査区からの類推で、古代の河川跡と近世以降の河川跡の重複したものである可能性を指摘しておくに留めたい。

なお、本庄市教育委員会が昭和60年度に実施した県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち九反田遺跡で検出された大溝1が、今回の西富田・四方田条里遺跡で確認した河川跡と関連するものであることが予想される。

本庄市教育委員会の増田一裕氏は、九反田遺跡の上越新幹線高架北側調査区の大溝1（幅15m、深さ1.5m）から西富田前田遺跡のLoc.7の西端部の外側を通過して現在の女堀川に平行し、さらに北東方向の「女堀川左岸と児玉新道間の微低地」に進む流路を復元している（本庄市教育委員会 1989 『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書—県営ほ場整備事業児玉南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査II』）。この復元案による限りでは、今回の平成9年度調査区の東部～中央部の河川跡の中程に南南西方向から流路が合流してこなくてはならないが、何分にも調査区の幅が狭いので十分な確認はできなかった。

しかし、今回の調査区の等高線の流れを考えると、もう少し西の上流側で合流した方がつじつまが合うような気がする。あるいは、2本の流れがあって、増田氏の復元した流路とは別に、現在の女堀川の流路にもう少し近い位置を流れる河道があったのかもしれない。したがって、今回の調査で確認した河川跡は、増田氏復元の旧河道とは別のものと考えられる可能性を留保しておきたい。

V 結 語

今回の西富田・四方田条里遺跡の調査成果の概要を前章までに記述してきたが、ここでは、出土土器のう

1 古墳時代前期土器の編年的位置

すでに第IV章で述べたように、古墳時代前期の土器は平成8年度調査区の第2号住居跡・第11号土壇でまとまって出土している。第2号住居跡からは、「特殊器台」・高環・埴・単純口縁壺・平底甕・台付甕・椀等、第11号土壇からは単純口縁壺と平底甕を中心に大小の埴を加えた土器群がある。いずれもハケ目調整が板目状・擦痕状・ヘラケズリ状等と表現するのが適当なようにやや粗雑となり、埴も「小型丸底土器」というには不適當な、中型品や小さな平底を作り出すものなど新しい特徴が目立つものである。第2号住居跡には一定量のS字状口縁台付甕の破片がある。これらには一見古そうな破片もあるが、図示した土器が大方の傾向を示しているのは疑いなく、口縁部形態がS字を保っている段階の中では新しいことも間違いない。

2 いわゆる「特殊器台」形土器について

西富田・四方田条里遺跡の古墳時代前期土器群の中の注目すべきものとして、「特殊器台」形土器という器台とその上に乗る別器種が結合した形態を呈する土器を取り上げる。

この種の土器については、既に熊野正也氏により詳細に検討が行なわれており(註2)、さらに検討を加えることは屋上屋を架けるに等しいかもしれない。しかし、西富田・四方田条里遺跡の出土例は熊野氏の示した諸例からややはずれる印象をもつものであり、少々考慮する必要がありそうである。以下、研究史の一部にも言及しつつ述べてみたい。

従来、この種の土器は、その形態的特徴から装飾器台形土器・高環状器台・異形高環形土器等々の名称を与えられてきた。かつて玉口時雄氏は、福島県いわき市平原高野遺跡の調査報告を行った論考の中で、この器種を「高環状器台」と呼称し、棒状浮文をもつ壺とともに「古式土師器を意義づける要素」として特論し、

ちまとまりのある古墳時代前期の土器に関して若干の考察を試みたい。

おおむね「五領式」あるいは「石田川式」の範疇には入れられるものの、ほぼ終末期的な特徴を指摘できる。第2号住居跡のホリカタから、まだ「内斜口縁」の形態になっていない丸底の椀が出土していることも和泉式段階に著しく近づいていることを物語る。

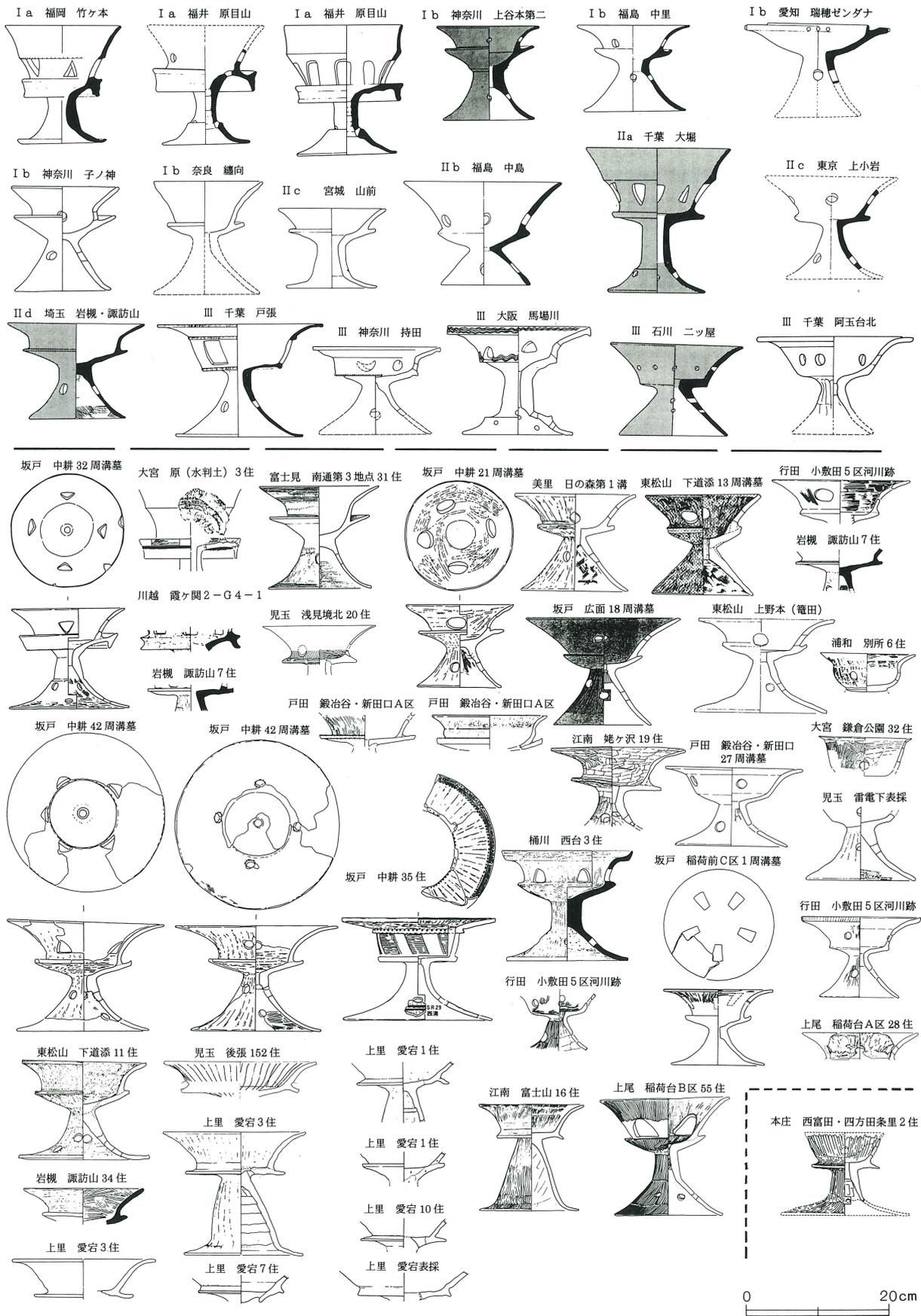
これらを、既成の編年として信頼性の高い横川好富氏の編年(註1)に当てはめるなら、大筋では第2号住居跡は五領Ⅲ式からⅣ式の過渡期的時期、第11号土壇は五領Ⅳ式段階と考えられる。しかし、虚心に考えると、横川氏の編年図には五領Ⅲ式・Ⅳ式ともに研究者によっては和泉式として把握しているものを含んでいる。ⅢとⅣの間に西暦400年を置いて、Ⅳ式の一部に和泉式と併行する期間を想定すれば、この辺の矛盾は解消すると考えられる。

「高環状器台」を16例紹介した。伊勢湾地方の弥生後期後半の高環に類似する例を『弥生式土器集成』本編(1964 東京堂出版)から指摘し、土師器においても東日本に出土例が多いとした上で、その性格については「日常用器的性格のものではなく祭祀的意義をもった特殊な土師器」と位置づけた(註3)。

また、佐原真氏はこの種の土器の名称の統一への提言をされ、「器台結合土器」とし、器台の上に乗る器種によって、「壺器台結合土器」「鉢器台結合土器」などと呼称した上で、壺部・器台部のような部位の呼び分けを主張された(註4)。

その後、熊野氏が1974、1977、1980年の3回にわたって資料紹介と土器の分類・土器の属性や分布の特徴などを検討された(註5)。熊野氏はこの土器を合計56例集成した上で、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類に大別された。Ⅰ類は壺口縁部・埴・鉢を器台上に乗せて結合させた、複数の土器を合わせた器形をなすもの、Ⅱ類は高環形を呈し、

第57図 「特殊器台」形土器



坏底部に鏢状突起をもつもの、Ⅲ類は高環形で脚部が小さく、坏底部に鏢状突起をもたないものとした。さらに、Ⅰ類は、器台部の形態からa類(器台部の口縁が帯状)、b類(器台部の口縁が素縁)、c類(器台部の口縁断面がコの字状)の3つに、Ⅱ類はa類(千葉県・大堀型。高環形で器受部下端に三角透かし)、b類(福島県・中島型。高環形で器受部下端に円孔)、c類(東京・上小岩型。高環形で坏部中央に円孔)、d類(埼玉県・諏訪山型。高環形で坏部は大きく外反、坏部には無穿孔)に細別された(第57図上段参照)。熊野氏は、Ⅲ類の形態からこの種の土器にあえて「特殊器台形土器」の呼称を与えた。最終的に熊野氏はこの土器の特徴や性格について①全国的に分布し、「土師時代前期」(古墳時代前期-利根川註)を中心に認められ、古いと考えられるものでも弥生時代後期を遡らない、②竪穴住居跡からの出土例が多い、③数多くの土器が存在するが、この種の土器は非常に少ない、④分布は北は宮城県から南は福岡県にまで及んでいる、⑤量的には、関東地方に集中する傾向がある、⑥念入りに仕上げられているものが多く、他の器形の土器と色別される、⑦各分類の規模も大方平均化している、という7点を指摘している。

埼玉県内の「特殊器台」形土器は、個体数の合計はまだ少ないけれど、第57図下段に示した各遺跡の出土・採集例がある。しかしながら、時間的制約のためにまた網羅的とはいえ、見落としが若干あると思われる。なお、第57図下段は熊野氏分類順や時間軸上の前後関係に従って配列しているわけではない。

この出土例から考えられることは、県内各地に割合

散在しており、特に集中する地域はないが、個体数としては坂戸市の住宅都市整備公団関係の諸遺跡に目立つ。住居跡からの出土が多いが、方形周溝墓の出土もそれに次いでいる。玉口氏の「祭祀的意義をもった」土器説についてはここから補強することもできよう。

熊野氏分類について考えられることをまとめておく。北陸系に最も近いⅠa類はごくわずかしがなく、Ⅰb類・Ⅱc類・Ⅱd類が出土個体数の大半を占める。これらは北陸系土器の原型をやや離れ、近畿~東海の土器との融合現象によって「高環形器台」と呼ばれる形態になったものであろう。Ⅲ類はさまざまなものがあるが、口縁部が屈折・外反する形態は近畿地方の弥生時代後期第Ⅴ様式の高環の形態に出自を求められるのではなかろうか。西富田・四方田条里遺跡例はⅡc類にあたると思うが、東京・上小岩例とはかなり異なる形態である。

なお、熊野氏のⅠb類とⅡc類は類似する個体が多く、Ⅱa類も器台部の口縁部形態が帯状になるか鏢状になるかを除くとⅠa類と類縁性が強い。大別・細別の基準を変更してこれらを整理し直す必要性を感じる。Ⅲ類も、出自がいくつかに分かれそうなためか細別すべきではないかと思う。

「特殊器台」形土器の上限は古墳時代前期初頭と考えてよさそうであるが、下限は、上里町愛宕遺跡や江南町富士山遺跡の出土例から和泉期初頭と考えたい。この段階はすでに高環となっているものしか存在せず、熊野氏分類Ⅱd式からの系譜としてよいが、愛宕遺跡の多くの事例からは徐々に形骸化しながら消滅する様相を考えるべきであろう。

註1 横川好富 1982 「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』第10号

註2 熊野正也 1974 「特殊な器台形土器について」『史館』第3号

熊野正也 1977 「特殊な器台形土器について」『史館』第8号

熊野正也 1980 「特殊な器台形土器について」『史館』第12号

註3 玉口時雄 1972 「古式土師器小考-福島県いわき市平原高野遺跡調査報告」『東洋大学紀要文学部編』第25集

註4 佐原 真 1972 「1971年の考古学界的動向・弥生時代(追加)」『月刊考古学ジャーナル』No.76

註5 熊野氏前掲論文

※各出土例の参考文献については、紙数の都合で省略する。